

日 本 の 点 字

第 34 号

ルイ・ブライユ生誕200年・石川倉次生誕150年記念特集号

目 次

ルイ・ブライユと石川倉次より	阿佐 博	1
点字の申し子、ルイ・ブライユ	三宮 麻由子	17
ルイ・ブライユ生誕200年・石川倉次生誕150年記念 点字ビッグイベント開催	日本点字委員会	22
マイケル・メラー氏の講演「ルイ・ブライユのすべて」		25
ルイ・ブライユ生誕200年記念国際会議	田中 徹二	35
ルイ・ブライユ生誕200年記念国際会議に参加して	指田 忠司	38
ルイ・ブライユ生誕200年記念式典に参加して	青松 利明	43
雪の中の三人女とルイ・ブライユ生誕200年記念国際会議	空 ひふみ	47
企画展「・・・点天展・・・」がめざしたもの	広瀬 浩二郎	52
世界点字協議会 (World Braille Council:WBC) 第1回委員会議事録		55
日本点字委員会第45回総会報告		57
編集後記		59

2010年3月

日 本 点 字 委 員 会

ルイ・ブライユと石川倉次

顧問 阿佐 博

先ほどは点字競技会で、何十人もの方が一斉に点字盤で点字を書く音を聞きました。久しぶりに聞く音でしたが、何か力強く盛り上がってくるような感じで、私は一種の爽快感とともに、点字の底力のようなものを感じました。

さて、本論に入ることにします。私はもう87歳になる点字の好きな老人であります。寝た切りではありませんが、時々起きの生活をしています。時々起きて講演に招かれたり、会議に出席したり、依頼された原稿を書いたりしています。そのほかはたいてい横になっています。横になっているからといってもいつも眠っているわけではありません。プロ野球の放送があるときはそれを聞いていますし、多くの場合本を読んでいます。本を読むことによって想像の世界を広げたり、いろいろな光景を思い描いたり、頭で旅をしたりしています。私はこれを「指先に広がる世界」と名付けて、一人で楽しんでいるのであります。このように私が読書に親しみうるのも点字があるお陰です。その意味において、私はルイ・ブライユと石川倉次に大変感謝しているのであります。それで今日はこの二人について時間のある限りお話しをさせていただきたいと考えています。

今年はルイ・ブライユの生誕200年に当たり、それを記念して「国際点字会議」も行われました。この会議は1月4日から8日まで、パリのユネスコ本部において開催され、約40カ国の代表が出席したとのことです。わが国からも正式代表2名と、幾人かのオブザーバーが参加されたようです。

こうした国際的な会議とは別に、わが国でも、各地でブライユ生誕200年を記念して、いろいろな催しが行われています。それに石川倉次生誕150年ということにも気がついて、わが国ではブライユ生誕200年と、石川倉次生誕150年を合わせて催しが行われているのであります。本日ここで開催されている「点字ビッグイベント」も、この両人を合わせて記念することになっています。

そこでまず生誕200年という意味について考えてみたいと思います。普通我々は生まれた日を祝して誕生祝いをします。しかしそれは生きている間のことで、亡くなってからは命日という形で、亡くなった日に、故人を偲んだり、霊を慰めるという形で行事が行われるのが普通です。亡くなってからも誕生祝いをするという人はおそらく

いないのではないのでしょうか。ところが生誕200年のお祝いというのは、一種の誕生祝いのようなもので、生まれた年を記念してお祝いをしているのであります。

こうした祝賀行事ということで、最近私の記憶にあるのは、3年ほど前に行われたモーツァルトの生誕250年という催しでした。モーツァルトは生まれが1756年ですから、2006年が生誕250年ということになります。各地で記念の演奏会などが行われたことを記憶しています。

それと似たようなことが今年も行われています。メンデルスゾーンが生誕200年という催しです。先日池袋の芸術劇場で、メンデルスゾーン生誕200年を記念する演奏会があって、私も聴きに行ってきました。メンデルスゾーンもルイ・ブライユと同じ1809年の生まれなのです。私はメンデルスゾーンが好きで、どの曲にも見られる美しい旋律に大変心惹かれるのですが、特にバイオリン協奏曲ホ短調と、交響曲第3番「スコットランド」は、何回聴いても飽きることがありません。

余談になりましたが、モーツァルトもメンデルスゾーンも、その音楽が好きかそうでないかは別として、おそらくその名前を知らないという人はいないでしょう。それほど世界的に知られた人です。このように世界的に知られた人だから、生誕何周年というお祝いの催しも行われるのであります。そしてルイ・ブライユもまたこれらの人に劣らないほど知られた人と言っても過言ではありません。音楽のように一般的なものではなくて、点字という特殊な分野のことではありますが、世界各国の関係者に知られているから、ブライユの生誕200年という国際的な催しも行われるのだと思うのであります。

ここで話題を変えて、文字と人類との関係について考えてみることにします。文字というのは人類が2千年も3千年も前から作り出していたもので、人間の生活と文字とは切り離すことができません。教育も文化の継承も我々は文字に大きく依存してきました。文字が存在したから、人間の文化はたやすく継承できましたし、また人間として成長するための組織的な教育も行われてきたのであります。しかし長い歴史の間には変わり者もいて、文字を排斥したという話も残っています。ギリシャの哲学者ソクラテスです。彼は文字を使うと頭を使わなくなると言って文字を排斥し、問答法という形で弟子を教育したと言われていています。だから彼の著書は残っていません。ところが弟子のプラトンが、ソクラテスを主人公にした約30編の対話編として著書を残しているのであります。それでソクラテスの業績も、2千数百年後の今日まで伝えられているのであります。文字を排斥した人の業績が、皮肉なことに文字によって伝えら

れているのであります。

ちょっと余計なことを申しましたが、残念なことに、視覚障害者は使いたくても使うことのできる文字を持っていませんでした。ですから視覚障害者の組織的教育ということも行うことができなかつたのであります。したがって社会的地位も低く、惨めな状態に置かれることになっていたのでと思われます。ルイ・ブライユはフランスの人ですから、200年前のパリの視覚障害者がどんな生活をしていたか、ちょっと見てみたいと思います。私の恩師で大河原欽吾という先生がいます。この大河原先生が、昭和12年に『点字発達史』という本を著されました。その中に、パリにおける視覚障害者の状態を記した一節があります。あまり気持ちのいい文ではありませんが、当時視覚障害者が置かれていた社会的地位を知るために、ちょっとだけ要約して紹介してみることになります。

「盲人は哀れな存在であつた。一般には町に出て人々の同情を買い、金銭を恵んでもらう以外に生きる道を持たなかつた。また興行師の親方に率いられて、衣服も帽子も異様な格好で街角に立たされ、道行く人々の笑いに供され、恵みの金銭を得るために利用されている一団もあつた。彼らはもちろん教育を受けることもなく、無知そのものというほかはなかつた。」

こんな記述であります。200年あまり前、視覚障害者は文字を持たなかつたために、教育の機会を得ることができなかつたのです。

そうしたときに、社会正義の実現という立場から、視覚障害者にも教育の機会を与えられなければならないと考える人が現れました。ヴァランタン・アウイです。ヴァランタン・アウイは1745年の生まれですから、18世紀後半から、19世紀初頭を生きた人ということになります。彼の青年時代と言え、18世紀も半ばを過ぎ、ボルテールやディドロやルソーなどといった傑出した思想家が現れ、封建社会に自由平等の思想が芽生えようとしていた時代です。ヴァランタン・アウイもこれらの思想家から、強い影響を受けた人権に目覚めていた一人でした。しかしそんなヴァランタン・アウイも、かつては街中で盲人たちの異様な格好を見て、笑いながら見物している一人だったのです。ところがある日、突然彼の人道主義が目覚めます。そして目前の光景に深い悲しみと憤りを覚え、その暴虐が許せなくなるのです。そして彼の心に浮かんできたのが、視覚障害者にも教育の機会を与えなければならないということでした。

しかし教育するには文字が必要です。そこで彼は凸字を開発するのです。凸字というのはご存じの方も多いと思いますが、特殊な活字を作ってそれを紙に強く押し当て

て文字の形を浮き上がらせたものです。触覚で読めないことはありませんが、非常に読みにくいものです。それでもヴァランタン・アウイはその凸字で教科書を作り、1784年にパリに世界最初の盲学校を創立したのであります。視覚障害者が初めて自ら読みうる文字を持ち、教育の機会が与えられたということで、記念すべきではありますが、自分で書くことのできない不自由な文字でした。しかし失明者用文字として、この凸字が欧米諸国に普及することになり、盲教育も始まることになるのであります。そしてパリ盲学校が創立されてから35年目の1819年に、10歳になったルイ・ブライユがその学校に入学することになるのであります。

ルイ・ブライユは1809年の1月4日にパリの東北約40キロ足らずの所にある、クープレーという小さな村に生まれました。私はルイが1809年に生まれたということに大きい意味があると考えています。もし彼が30年早くあるいは30年遅く生まれていたら、今日のような6点点字が考案されていたかどうか、疑問だと思うからであります。

私は一種の歴史観を持っています。それは、歴史の転換期には、天才や英雄が群れをなして出現するらしいというものです。理由は分かりません。しかし時代がそのような才能を必要として、招くのではないかという気がしているのであります。例えばイタリア・ルネッサンス期におけるミケランジェロ、ダヴィンチ、ラファエロのような絵画・彫刻・建築など造形美術の巨匠たちは1470年前後に生まれていますし、フランス革命の原動力となった啓蒙思想を起こしたモンテスキューや、ボルテールや、ディドロなどは1700年前後に生まれています。わが国でも戦国時代を平定するためには、やはり織田信長や、豊臣秀吉や、徳川家康が出なければならなかったのではないのでしょうか。このように歴史を振り返ってみますと、本当にその時代が必要とする才能を呼び寄せたとしか思えないような場面がたくさんあることに気づかされるのであります。19世紀の初めというのも、私は歴史の転換期だったと思うのです。メンデルスゾーンがルイと同じ1809年の生まれだったということは先ほど申しました。音楽の話をしましたので音楽家に限りますけれど、翌年の1810年にはショパンとシューマンが生まれています。リストが生まれたのは1811年、1年置いて1813年には、ベルディとワグナーが生まれているのであります。クラシック音楽で言えばこの時期はウイーン古典派の音楽が終末期を迎え、ロマン派音楽の開花期に当たっています。そして1809年から1813年までの5年間に、ロマン派音楽を代表する巨匠たちが生まれているのであります。それは本当に時代がそのような才能を必要として、招いたとしか考えようがありません。

それとともに私はこのときが近代盲教育の開花期であったとも思うのであります。約30数年前にヴァランタン・アウイによって芽生えた盲教育のつぼみが膨らみ、開花期を迎えようとしていた時代だとも思うのであります。そしてその時代が、シャルル・バルビエという特殊な才能の持ち主と、ルイ・ブライユという天才を招き寄せたのだと考えるのであります。

ルイの生家は今ルイ・ブライユ記念館として、WBU（世界盲人連合）が管理しています。私はその記念館を2回訪ねています。記念館を訪ねてルイの遺品などを見ていますと、ルイの誕生も彼の失明も、視覚障害者のための人権回復のために、歴史が要求したのではないかと、本当にそんな思いに捕らえられたものでした。

さて、ルイの個人的なことについて少しだけお話ししたいと思います。ルイの父の職業は馬具師でした。したがってその仕事場には皮を切ったり穴を開けたりするための磨き上げられた鋭い刃物がたくさん置かれていました。ルイが3歳のとき、その仕事場に入って父の仕事の真似をしようとしていて、誤って目を突いたらしいのです。しかしその様子を見ていた人はなく、何の記録も残ってはいません。分かっているのは1812年の出来事だったということだけです。もちろん両親はできる限りの手を尽くしますが、当時の医学ではそれを治療する積極的な方法はありませんでした。ルイの目は化膿し、やがてそれが他の目にも波及して、5歳になったころには両眼とも完全に失明していたと言われています。計算してみると、1814年には失明していたことになります。

しかし先ほどのパリの失明者たちの話とは異なり、ルイの子供時代は大変恵まれていました。1815年にクープレーの教会にジャック・パリュイという新しい神父が就任してきます。神父の最初の仕事は教区内の家々を訪ね歩くことですが、ブライユ家に賢そうな盲目の少年のいることに気づき、彼は時々その少年を自分の教会へ連れて行って、ちょっとした教育を始めるのです。パリュイは植物のことや、動物のことや、季節の移り変わりのことや、宇宙のことなどについて話をして聞かせたとされています。もちろん聖書についての教えにも力を注いだことでしょう。こうしてルイの心の奥に神を信ずる気持ちが芽生え、パリュイ神父によって育てられたこの信仰は生涯彼の心から離れることはありませんでした。

ちょうどそのころ、クープレーの学校に、アントワーヌ・ベシュレという若くて熱心な校長が就任することになりました。パリュイ神父は直ちにベシュレ校長を訪ね、ルイの就学について相談します。村人や役人の中にはルイの入学について批判的な人

もいましたが、ベシュレ校長は自らの決断でルイを受け入れることに同意するのであります。だから学齢に達したルイは、村の小学校に入学することができました。小学校への入学は果たしましたが、パリュイ神父はなおルイの未来のことについて心配していました。そこでルイの進むべき最善の道はないかと考え、人にも相談し、自らも手を尽くして研究していました。そうした中で、パリに盲学校のあることを知るのです。パリュイ神父は、ルイはやはり盲学校へ進むべきだと考えました。そこでルイに盲学校への進学を勧め、その手続きを取るのです。

1819年2月15日、ルイはパリ盲学校へ入学することになりました。その日の朝、父はルイを連れて馬車でパリへ向かいます。風の冷たい霧の深い朝でした。父はルイに馬車の窓から見える風景をいちいち説明して、旅が楽しくなるように気を配りました。しかし父にはルイを手放さなくてはならないという心配があり、ルイには家族と離れて一人になる不安があって、冬景色の中の約4時間の心細い旅になったのでした。

しかし盲学校に入学したルイは、すぐ学校にも慣れ、友だちもできて元気に勉強を始めます。そして何よりも彼を喜ばせたのは、自分で読むことのできる本があったことでした。実はルイはアルファベットを読むことには慣れていたのです。彼が村の小学校に入学したとき、父はルイにアルファベットを教えるために、特殊な文字盤を作っていたのです。それは長さ7,80センチ、幅6,7センチのきれいに削った板に、頭の丸い小さな鋸を打ち付け、アルファベットの字形をかたどったものでした。それに触れてルイはアルファベットの形をしっかりと記憶していたのでした。その文字盤は今も大切に保存されており、私はルイ・ブライユ記念館を訪ねたとき、その文字盤をよく見てきました。打ち込まれた鋸の頭が丸くてすべすべしていて、点字に触れる感覚に似ているのです。この文字盤で鍛えたルイの触覚が、後に点字を考案した一因になっているのではないかと私は考えています。

話を元に戻しますが、そのころ、フランスの砲兵大佐シャルル・バルビエが、不思議な文字を開発していました。点と短い線で構成された文字です。それは軍隊の命令をどんなに暗いところででも兵士から兵士へ密かに伝えるためのいわゆる軍事用の文字で、これを「夜間書法」あるいは「夜の文字」と呼んでいました。暗闇で読まなければならないのですから、視覚に頼ることはできません。視覚でなければ触覚ということになるのですが、触覚なら線よりも点の方が分かりやすいと考えたのは、バルビエの素晴らしいアイデアだったと思います。しかし軍事用としては実際には使われなかったようで、バルビエはこれを改良して盲人用の文字にしたいと考えたのです。いろ

いろ工夫していわゆる「バルビエの12点点字」というのを作ります。これはアルファベットを表すのではなく、フランス語の音を表すもので、これを「ソノグラフィー」と名付けました。彼はこれを1821年4月11日に盲人用の文字として使うようにと言って、パリの盲学校に持ち込んだのです。当時の校長はピニエといたのですが、ピニエ校長は実験してみることを約束します。そして生徒や職員を集めて、ソノグラフィーの説明をして、実物もみんなに見せたのです。そのときルイの顔が輝いたと言われています。ルイには父の作った文字盤を読んでいたときの感覚が蘇ったのではなかったでしょうか。

バルビエは器用な人で、ソノグラフィーを書くための器具も作っており、それを幾台も学校に置いていきました。点からできている文字は凸字に比較するとはるかに読みやすいし、自分で書くこともできますので、生徒たちは喜んでその勉強を始めました。中でもルイの上達は抜群だったと言われています。もしルイが普通に言われる優秀な学生だったら、ソノグラフィーの上手な使い手になっていたことでしょう。しかし12歳の少年ルイはただそれに上達するだけでなく、すぐその欠点に気づくのです。まず第1にソノグラフィーではアルファベットを綴ることができません。音の集まりとしての言葉を記号で表すだけなのです。また句読点（コンマやピリオドなど）は使えません。ソノグラフィーには句読点がなかったからです。そのほかにフランス語を書いたり読んだりするときに欠かせないアクセント記号（母音の音や長短などを示すための記号）や数字も書けません。もちろん楽譜も書けませんでした。そのうえ縦6点、横2点の12点点字ですから、一つの言葉を表すのにたくさんの点が必要だったし、それに縦6点というのは、指先の触覚には余るものでした。そこでルイはこれを改良することを考えたのでした。普通なら12点が多すぎるのなら10点にしようとか、8点にしようとか考えるのではないかと思うのですが、ルイは直感的に半分の6点で、目的が達成できると考えたようです。あとでお話ししますが、実は石川倉次は普通の人があるような過ちを犯しているのです。ルイは13歳になったころには12点の半分の6点で、しかもアルファベットも句読点もアクセント符も数字も楽譜も表すことができるという見通しをつけて、ピニエ校長に報告しているのであります。そして15歳になったころには、6点の最も合理的な配列、すなわちブライユの配列表を完成し、それに基づいて、アルファベットも、句読符も、アクセント符も、数字や楽譜も表すことのできるシステムを作り上げてしまったのです。15歳と言えば、先ほどお話ししたメンデルスゾーンも、第1交響曲は15歳のときの作品だと言われています。

10代前半というようなそんな年齢で、直感的な知恵が働いたり、大きな仕事のできる人を天才と呼ぶのではないのでしょうか。その意味において、ルイもメンデルスゾーンも生誕200年を祝うにふさわしい天才だったと思うのであります。

ルイが15歳と言えば、1824年ということになります。ルイの考案に感動し、点字のよき理解者だったピニエ校長は、翌1825年には、6点式の点字器を製作し、それを貸し与えて非公式にはありましたが、生徒たちに点字を使うことを認めているのであります。それで生徒たちは自由にノートを取ったり、日記をつけたり、互いに手紙を出し合ったり、好きな文章を書いたりすることができるようになったのです。しかし教員の中には、視覚障害者間だけに通じて、健常者に通じない特殊の文字を使うことは、視覚障害者の差別につながると考える人が多くて、学校として公式に点字を認めることにはなりませんでした。

その後点字が公認されるまでにはいろいろないきさつがあるのですが、時間の関係で細かいことはお話しできません。ただ一つ有名なエピソードがありますので、それをお話ししたいと思います。

ルイはもちろん点字が正式な文字として、教育に取り入れられることを望んでいましたし、彼の指導を受けて点字に習熟した生徒たちもそれを強く希望していました。しかし事態はむしろ悪い方向へと向かうのです。1840年に点字に好意的だったピニエ校長が退職し、その後任として、教頭だったデュフォーが就任します。このデュフォーは点字使用に最も反対していた人の一人で、校長に就任するとすぐ「点字使用禁止令」を出します。この禁止令によって、点字を使っているところを見つけられると罰せられることになったのであります。ピニエ校長の退職はルイにとっては大きい痛手でした。しかし思いがけないことから、点字が広く認められることになるのです。

デュフォーは校長就任に当たって、甥のジョセフ・グアデを自分の協力者として採用していました。しかしグアデは盲教育とは無関係な文学者でした。彼はデュフォーが禁止しているにもかかわらず、生徒たちが隠れて点字を使っていることに気づきます。そしてそれを観察していますと、点字は読むスピードにおいても、凸字の比ではないことにも注目するようになります。そんなこともあって、彼は点字こそ失明者のための文字だと確信するようになり、デュフォーの考えも変えさせようと思うようになるのです。そのためには何らかの切っ掛けも必要だし、チャンスにも恵まれなければなりません。その絶好のチャンスが訪れるのです。

その前にちょっとパリ盲学校の新築移転についてお話ししておかなくてはなりません。

ん。最初盲学校のあったヴィクトール街というのは、湿っぽい土地で、下層階級の人たちでごみごみ混み合っていて、非衛生的な土地だったのでした。その学校を見学した人もたくさんありましたが、その中に有名な詩人で歴史家のアルフォンス・マリ・ルイ・ド・ラマルティーヌという人がいました。ド・ラマルティーヌは政治家で下院議員でもあったのです。このド・ラマルティーヌは国会演説の中で、盲学校をもっと衛生的な土地に移転する必要のあることを強調しました。この演説に心を打たれた議員たちは、直ちに国の予算で、新しい土地に盲学校を移転することを決議します。そして新しい盲学校は、アンバリット通りという所に移されることになったのです。ここは近くに軍の病院があったり、広い公園があったりして、空気のきれいな清潔な土地でした。そして1843年11月に新築工事が完成して、移転を完了するのです。それがパリ盲学校の現在地でもあります。

移転を終えた盲学校は、翌1844年2月22日に、盛大な落成式を挙げることにになりました。グアデはその日を選んだのです。

新築祝賀会場には、フランス政府の高官や町の名士を始め、生徒の父兄や卒業生など、多くの人が参列していました。プログラムはコーラス・クラブの合唱に始まり、それに生徒有志の詩の暗誦やピアノ演奏などと続き、その後グアデが用意したプログラムが展開されたのでした。

まず壇上に立たされたのは点字盤を持った全盲の少女でした。グアデは来賓の一人に短い詩を暗誦してもらい、少女にそれを書き取らせました。次にその場にいなかった少女が呼ばれて入ってきて、先の少女が書いた用紙を渡されると、それをスラスラと読み上げました。それからグアデはまた来賓の一人に短い歌を歌ってもらい、そのメロディーを楽譜として一人の教師に書き取らせました。そこへまた別の全盲の生徒が呼び込まれて、書き取られた楽譜を見ながら、そのメロディーを口ずさんだのでした。どの生徒も素早く楽々とそれらをやってのけたのです。

割れるような拍手でした。グアデの計画は見事に成功したのでした。こうして点字史上忘れることのできない大ドラマが演じられたのでした。ルイの予期しない事態であり、彼自身も驚きましたが、同時に彼の長年にわたる苦闘が報いられた瞬間でもありました。こうして点字の文字としての優れた点が認識され、デュフォーの「点字使用禁止令」は解かれました。さすがのデュフォーも点字の効用を認めざるを得なかったのです。しかしフランス政府が公認したのは、さらにそれから10年後の1854年だったのでした。

ルイは26歳ころに肺結核に罹患し、その後病状は一進一退を繰り返していましたが、そのころは病状もかなり悪化していました。しかし彼は学校内に住むことを許され、周囲の人々の愛情に包まれて静かな生活を送っていました。しかし1851年12月4日、激しい咯血があり、その後も何回も同じような咯血があつて、彼自身地上での生活の終焉を自覚するに至るのです。間もなく迎えたクリスマスはベッドの中で祝いました。こうして年が明けて1852年1月6日、43歳の誕生日の2日後に彼は静かに最期を迎えたのであります。彼の遺骨はクープレーの墓地に葬られることになりました。フランス政府が点字を公認したのは1854年ですから、彼の死後2年も経ってからということになります。

ルイの伝記を書いたジャン・ロブランは、「当時の新聞に、彼の死を伝えた記事を探しても無駄であつた」と記しています。パリ盲学校内では非公認ながら点字が使われていましたが、外部的には何も知られず、彼は無名の一教師として世を去つたのでした。

しかしフランス政府が公認してからは、点字は徐々に外国にも知られるようになりました。特に1878年、ヨーロッパの諸国、すなわちオーストリア・ハンガリー・ベルギー・デンマーク・イギリス・フランス・ドイツ・オランダ・イタリア・スウェーデン・スイスの諸国がパリで国際会議を開き、点字の採用を決定します。それから点字は急速に各国に普及することになったのでした。

その後も点字に関するいろいろな国際会議はありましたが、最も有名なのは、1929年のルイの点字考案100周年を記念しての点字会議でした。この会議には18カ国が参加し、点字楽譜の国際的統一が図られたのでした。ルイは1829年に、『言葉、音楽、単旋律聖歌を盲人のために点で書き表す方法』という本を出版しました。これはルイが点字に関して公に発表した最初のものでした。それでこの1829年を点字考案の年と考えて、点字考案100周年記念の行事として行われたものでした。当時東京盲学校に福家辰巳ふけたつみという全盲の音楽の先生がいて、このときの決定に基づいて『点字楽譜の書き方』という本を書きました。私は学生時代に、この本を使って点字楽譜を教わつたものでした。

現在ではブライユ・システムの点字によって、アラビア語を始め、インドシナ各国語、インドの方言やアフリカの方言なども表すことができるようになっています。

このように点字の普及とともにルイ・ブライユに対する評価も高くなり、1952年にはフランスの偉人の仲間入りをすることになりました。ルイの死後100年に当たり、

フランス政府はルイをパリのパンテオンに合祀することを決定したからであります。パンテオンというのはフランスの偉人を合祀する寺院なのです。

1952年6月、クープレー村にあるルイ・ブライユのお墓に世界中から40カ国の代表が集まりました。その人たちはまずルイのお墓にお参りし、その後ルイの最後の旅に付き添ったのです。ルイの遺骨が分骨されてパンテオンに送られることになったからです。ルイが10歳のとき、パリ盲学校に入学するために、寒い冬の朝、クープレーからパリまで父とともに馬車で心細い旅をしたお話しをしましたが、彼の死後100年を経て、彼の遺骨はその同じ道を世界40カ国の代表に付き添われながらパリへ向かったのです。

今ルイはビクトル・ユーゴーやエミール・ゾラやキュリー夫人などフランスの偉人とともにパンテオンに眠っています。

一つだけ確かなことがあります。ルイがクープレーのお墓で眠ろうが、パンテオンで眠ろうが、人々は決してルイ・ブライユの名前を忘れはしないということです。今こそルイの天才を世界中が認め、その生涯の物語を語るべきときだと思うのであります。

最後に一言、点字制定年について付記しておきたいと思います。1929年に、点字制定100周年記念の国際点字会議が行われたことは既に述べました。しかし点字制定150周年記念の国際会議は、1979年ではなく、1975年に行われたのです。実はルイは1824年（15歳）までに、句読符やアクセント符を含むアルファベットを始め、数字までも完成していたのです。このルイの功績に対して、翌1825年にピニエ校長は、6点对応の点字盤を製作し、生徒に貸し与えて非公式ながら点字を使うことを奨励したのでした。それで生徒たちはノートを取ったり、日記をつけたり、自分で簡単に文字が書けるようになったのです。このように実用的に点字が使われ始めたのが1825年だったので、その年を点字制定年として、1975年に点字制定150年祭を行ったのです。その後は一般的に1825年を点字制定年と考えられるようになっていきます。

さて、ルイ・ブライユのお話しで時間の大半を費やしてしまいました。あと駆け足で、石川倉次のお話しをしたいと思います。今はもう石川倉次に直接お会いしたという人も少なくなってしまったと思いますが、私は少なくとも3回以上お会いしています。第1回は昭和12年、私が東京盲学校の中等部に入学した年のことです。石川先生が何かのご用で学校へ来られたのでしょうか、そのとき点字の翻案者だということで

紹介されました。しかしそのときは個人的なお話しをしたわけではありません。お声を聞いただけでした。第2回目は私が師範部に入学した昭和16年の春ころのことです。クラスメート5,6名で、先生のお宅をお訪ねしたのでした。先生は学校から都電の停留所にして三つ目くらいの丸山町というところに住んでおられたのです。そのときはみんな、点字翻案当時の学校の様子などいろいろお聞きしました。第3回目は昭和19年の冬のことで、私はその3月に卒業して岡山の盲学校に赴任することが内定していたときのことで、もう1度先生にお会いしておきたいと思って一人でお訪ねしました。そのときは、6点全部を「メ」の字にしようと思いついたことによって、一つの発想を得て、50音を完成することができたことや、点字盤を最初に作った滝録松ろくまつのことなどお話ししてくださいました。このようにして私は石川倉次という人に直接お会いしていますので、石川倉次と呼ぶよりは、石川先生と呼ぶのが自然なので、そのように呼ばせていただきたいと思います。

石川先生は1859年（安政6年）に士族の子として浜松で生まれています。10歳のとき千葉県に移住し、明治12年に千葉師範学校を卒業して小学校の教員になっています。そして浜田小学校（現在の幕張小学校）在職中の明治17年に、当時女子高等師範学校教諭だった小西信八のぶはちと出会うのです。やはり私にとっては自然な小西先生と呼ばせてもらうことにします。

明治初年には国字改造論というのが盛んでかな文字論者とか、ローマ字論者というのがたくさんいました。わが国で最初の近代的国語辞典『言海』の編纂者として知られる大槻文彦博士もかな文字論者で、彼は「かなの会」という研究団体を作っていました。小西先生も石川先生もその会に入会しておられたのです。その会には有力なメンバーとして、高等師範学校教授な か みち よの那珂通世博士も加わっていました。明治17年1月に、このかなの会が研修会を開催したときのことで、石川先生はその会に出席したのですが、会場に着いてみると何となく見覚えのある顔があり、それを那珂通世博士だと思って、自分の名を名乗り丁寧に挨拶したのです。ところが実はそれが人違いで、小西信八先生だったのです。石川先生はその日の日記に「既にして那珂先生来たりしと思ひしに、小西信八君にて人違いをしたりしは、まことにおかしくまた恥ずかしかりき」と記しています。この不思議な出会いがあつて二人は意気投合したらしくて、親しい交わりが始まるのです。

その2年後の明治19年1月に、女子高等師範学校教諭で、附属幼稚園の主任も兼ねていた小西先生は文部省の直轄になったばかりの楽善会らくぜん訓盲哑院へ専務として転勤を

命ぜられます。楽善会というのは明治8年にイギリスの宣教師ヘンリー・ホールズを中心に時の有力者数名によって、盲教育を考える会として発足した委員会です。楽善会訓盲啞院は、明治13年にこの委員会が設立した盲啞学校だったのです。それが明治18年暮れに文部省に移管されたのでした。東京盲学校の誕生で、2年後の明治20年に東京盲啞学校と改名されるのであります。

小西先生が赴任したとき人手不足でどうしても1名増員しなければなりませんでした。小西先生の頭に浮かんだのは石川先生で、そのころ茂原もぼら小学校に在任中だった石川先生に声をかけます。しかしあまり突然のことだったし、先生は盲啞教育のことなど考えたこともなかったので、小西先生の申し出を断ります。しかし小西先生はあきらめることなく、「君のような熱心で親切で考え深くて向学心に燃えている人こそ盲啞教育には必要なのだ」と言って強引に説得したのです。この説得に負けた形で、石川先生は明治19年3月に楽善会訓盲啞院へ転勤して、小西先生の下で働くことになるのであります。

楽善会訓盲啞院では凸字で教育をしていました。それは非常に非能率的なものだったので、小西先生は何かいい方法はないかと、あらゆる方面に手を伸ばし視野を広げて研究しました。その結果、ついに点字のあることを発見したのです。しかしそれは当然のことながらアルファベットを綴るシステムだったので、小西先生はそれで仮名文字を表すことができるようにしたいと考えました。そして明治20年の末に、その仕事を石川先生に託したのでした。それから石川先生はその研究に着手し、心血を注ぐことになるのです。

6点の組み合わせは63通りあります。しかし縦2点とか横2点とかのように同じ形のもを除くと44通りしかありません。石川先生は、44通りでは仮名文字48字を表すことはできないと考えました。そこで2点増やして8点として目的を果たそうとしたのです。先ほど石川先生はルイのような天才ではなく、普通の人々が犯す過ちを犯したのだということをお話ししましたが、それはこのことだったのです。

石川先生は上の①④の点の間と下の③⑥の点の間に1点入れて、縦横3点で真ん中の抜けた8点点字を考えました。それから明治23年の7月ころまで3年近くもこの8点点字で仮名文字を表す方法として何十種類もの案を創って見たのでした。しかしそのどれにも満足することができませんでした。

石川先生は研究の過程において、生徒たちに協力を求めているいろいろな実験なども試みられたことでしょう。また、同僚間の話題にも上ったことと思われます。小西先生

は点字の翻案に当たって、教員も生徒も協力するように呼びかけていましたので、この問題は、教員間、生徒間を問わず、当時校内で最大の話題になり、教員の中にも学生の中にも自らの案を出すものが現れるようになりました。石川先生には小西先生から託されたという責任がありましたが、他の者はそんな責任など感じることなく、いわばゲーム感覚で自分の案を発表したものと思われまゝ。実は明治22年の暮れころ、学生の伊藤室井案とか、教員の遠山案とか、6点式の仮名文字対応案も出ていたのです。伊藤室井案は、ブライユの配列表に単に五十音を配当しただけの単純なものでした。遠山案もそれに似たものでしたが、ちょっと手を加えてありました。そんな案も出ていたのですが、石川先生はなお8点点字に固執し続けていました。明治23年7月20日の石川案というのがありますが、それはまだ8点点字でした。ところが二日後の7月22日石川案というのがある、突然6点式に切り替わっているのです。何かヒントがあったものと思われまゝ。しかし6点式に切り替えてからも、7月31日案、8月10日案、同12日案、18日案、21日案、23日案、27日案と次々に新しい案を出しています。そして8月27日案で、ア行には配列表の1段目の文字を使い、ワ行にはその低下文字を使うという発想を得ているのです。ワ行がア行と同形であっても、文章にした場合、隣の文字との上下の位置関係によって、明らかに区別できることに気づいたのです。

それと同時にこの日重大な決意をしています。点字は失明者が読む文字だから、6点全部を「メ」に当てようと考えたのです。配列表の1段目には⑤の点を使っていない文字が五つあります。それをア行と決めました。そこでア行とワ行ができたわけです。こうしてできたア行の「エ」に③⑤⑥の点を加えるとメになります。同様にア行のすべてに③⑤⑥の点を加えるとマ行ができました。ローマ字論者でもあった石川先生にとって、このマ行の成立は大きい意味を持っていました。母音に子音を加えるという発想が生まれたのです。③⑤⑥の点の組み合わせは7通りあります。その7通りをア行に加えることによってカ行・サ行・タ行・ナ行・ハ行・マ行・ラ行の7行ができることが分かりました。そしてヤ行にはア行の低下文字に④の点を加えることにしたのです。こうして五十音が完成したのであります。ですから8点方式を捨て、6点方式に切り替えてからわずか1カ月あまりで石川案は完成しているのです。

このようにして石川案が完成したのですが、6点式では前に遠山案や伊藤室井共同案なども出ていますので、どれを採用するか決めなければなりません。そこで明治23年9月27日土曜日の午後選定会議を開くことにしました。学生からも案が出ています

ので、この会議には教員とともに学生も出席しています。出ているのは、石川案のほか、教員の遠山案、学生の伊藤室井共同案の3案です。この3案について比較検討し論議を重ねたのですが、その日は結論には至りませんでした。

そこで次の土曜日の10月4日に第2回選定会議を開きました。この日も結論は出ませんでした。この日の収穫は、濁点や半濁点は清音の前に置くという原則を決定したことでした。

次の第3回の選定会議は10月18日の土曜日に行われました。この日も結論には至りませんでした。数字はブライユ・システムそのままを用いること、及び表記について、語と語との間は一マスあけ、句と句との間は一マスあけるという分かち書きの原則を決定し、さらに助詞の「を」はワ行の「ヲ」を用いることをも取り決めていました。

そして11月1日の第4回選定会議で、ついに満場一致で石川案が採用されることになったのであります。その論拠は、音韻の上から見ても、学習の容易なことから見ても、紙面の経済の上から見ても優れているからということでありました。

この選定会議の特徴は、非常に民主的な形で行われたということであります。案が学生からも出ていましたのでそれらを平等に取り扱い、選定会議には常に教員とともに10名内外の学生も出席していました。そして教員とか学生とかの区別なく誰もが自由に発言して、満場一致に至るまで討議を重ねたのでした。このような極めて民主的な方法でわが国の点字は誕生したのであります。

当時は歴史的仮名遣いが行われていましたので、五十音と濁音があれば一応文を書き表すことができました。例えば「キョー」と書こうと思えば「ケフ」と書けばよかったし、「チョーチョー」と書こうと思えば「テフテフ」と書けばよかったからです。しかしローマ字論者でもあった石川先生は、本来は表音的仮名遣いが望ましいと考えていました。それで拗音の研究に着手し、画期的なシステムを完成し、明治31年2月15日に発表します。そしてこの拗音を東京盲啞学校として翌明治32年7月6日の会議で決定し公認したのであります。

この五十音及び拗音は、明治34年4月22日の官報で「日本訓盲点字」として公表され、国としてもこれを公認したことになったのであります。

最後にちょっと、ルイ・ブライユと石川倉次を比較して私の講演を終わることにしたいと思います。ルイが12点点字に接したのは12歳のときで、すぐその欠点に気づきます。12点は多すぎると思ったのです。もし12点が多すぎると考えたのなら、10点にしたり、8点にしたりと考えるのが普通ではないでしょうか。しかしルイは半分の6

点で目的の達成できる見通しを立て、13歳のときにはそれをピニエ校長に報告しているのです。まさに天才的ひらめきによるというほかありません。ところが石川先生は、結局は6点で済むところだったのに8点点字でなければ目的は果たせないと考えて、それで3年近くも時間を空費しているのです。この違いを皆さんはどうお考えでしょうか。

私はルイ・ブライユはまさに天才だったというほかないと考えています。しかし石川先生は、普通の平凡な人の論理で物事を進める人だったと思うのであります。しかし先生は優れた優秀な教育者でした。その優れた教育者が時間はかかりましたが、最後に論理的に見事なシステムを作り上げたのでした。考えてみますと、天才ばかりそろったのでは健全な社会は成立しないと思います。一方に天才が存在し、他方に優れた教育者があり、その他諸々の人がいて健全な社会は成立するのだと思うのであります。ルイ・ブライユと石川倉次について、私はそのような評価をしているのであります。

ご清聴ありがとうございました。

点字の申し子、ルイ・ブライユ

さんのみや ま ゆ こ
三宮 麻由子

ブライユの年譜と世界の情勢を擦り合わせてみると、興味深いことが浮かび上がってくる。それは、点字はまさにルイの時代、ルイその人によって「完成すべく定められていた」とさえ思われるということである。

点字の父ルイ・ブライユのおかげで、風景をもたない私たちは、風景も心象も歴史も表現してくれる「文字」を与えられ、普通市民として文明に参加する術を得た。日本では、ブライユの点字をいち早く採用した石川倉次の英断により、私たちはルイの死後半世紀を経ずして母国語を自由に読み書きする道を開いていただいたわけだ。ゆえに、ブライユの功績と、石川はじめ、日本点字の創設者となった盲学生の先輩方への感謝と敬意は汲めども尽きない。

ここではそれを踏まえ、平成の日本で入手できるわずかな資料からとらえた私なりのブライユ像を語ってみようと思う。

一応、いくつかの資料からブライユの半生を簡単にまとめておくと、ルイ・ブライユは、1809年にパリ郊外で馬具職人シモンの二男として誕生する。明るく利発な子どもだったが、3歳のとき、一人で父の仕事部屋に入って革に穴を開けようとしたところ、道具で目を突いて出血し、それが原因で両眼を失明する。

しかし、村に赴任してきた小学校の校長や所属教会の司祭がルイの才能を見抜き、個人指導や統合教育など、当時フランスの地方職人の家に生まれた盲児としては考えられない恵まれた教育を受けた。さらに、司祭の仲介である侯爵の庇護を受け、パリ盲学校に入学するのである。

ルイは、優秀な成績を修めながら人望の厚い大人に育つなかで、点字の完成と普及を生涯の仕事と認識していく。一方、音楽の才能を発揮してノートルダム大聖堂のオルガニストを務め、盲学校で教鞭を取る。しかし、結核を発病し、1952年、弱冠43歳で没する。

盲学校の中学生だったルイが、点字の基礎となる6点方式や組み立ての法則を生み出したばかりか、数学や楽譜までを見事に完成させるという卓越した才能をもってい

たこととともに私が注目したのは、ルイが生まれた時代背景と、彼を取り巻いた人々、そしてルイの父親の考え方である。

私がルイ・ブライユの伝記を読んだのは小学2年か3年の頃だった。そこではルイの偉大な功績と献身的な努力が物語風に描写され、ルイがたった一人で点字を仕上げたという印象だった。しかしルイの時代、英国や米国ではすでに何種類もの触知文字が考案されており、試行錯誤とともに激しい権力抗争まで起っていた。それは、19世紀啓蒙主義精神の開花で「盲目の子どもたちにも教育を」という高邁な理想が市民権を得たことの結果でもあった。ルイが在籍したパリ盲学校の創立者で現在もパリの点字図書館の名前となっているバラントン・アウイ氏は、この精神を実践し、アルファベット文字を紙に立体印刷したものを触知する「凸字」を考案した。ルイはこの凸字で「読む」喜びを知り、より読み易い触知文字の完成を夢見るようになる。そして、その後に出会ったバルビエの12点点字に着想を得て、墨字から独立した「指1本の中で触知可能な文字」の開発を決意するのである。

たとえばフランス革命最中のような荒れた時代では障害者を教育しようなどと考える余裕は人々になかったろうし、ルネサンス期はようやくグーテンベルクの印刷術が普及した段階で、触知文字の印刷技術はまだ確立できなかったかもしれない。つまり、文明の成熟度も技術も、世界の情勢も、すべてが点字開発を可能にする状況でなければ、点字の完成はあり得なかったわけだ。とすれば、このような時代のただなかに生まれ、失明という利点を生かして触知の原則を発見し、それに基いた効率的な文字を確立したルイは「点字の申し子」だったといえよう。私は、まずルイがこの使命の自覚と能力を授かって、この時代に生まれたことそれ自体に大きな意味を感じるのだ。

また私は、この時期、すでに健常者を含む多くの人が私たちのために文字を作ろうと世界のあちこちで奮闘してくれていたことに強く感動した。当時は私たちに福音書を読ませたいという明確な動機もあったようだが、そうだとしても、私たちを文明に組み込むために、健常者が尽力してくれたことを思うとき、私は人類最大の美德の一端を見る思いなのである。

次に、ルイが良き友と良き師に恵まれたことを忘れてはならない。伝記によれば、彼は幼い頃から一般学校で楽しく学び、教会ではよく教えを吸収した。そのため友達も多く、特に盲学校入学以後は、早くから指導者として学生や仲間から敬愛されたようである。

私が入手した資料のなかで特筆すべきは、フランス語の点字になっているルイの書簡集と、二人の日本人が著した伝記だった。二つの伝記はともに、ルイの信仰の深さと、神から授かった使命の自覚、そしてその実践のための献身を強調している。その記述の根拠が判然としないので、私にはあくまで「伝記によれば」と書くことしかできないが、もし何らかの裏づけがあるとすれば、ルイの人望は、幼いころから変わらない素直な気持ちと神の召命への自覚の賜だったといえるだろう。

書簡集に収録されていたのは、ルイを最も評価し、点字の普及に初期から尽力を試みたピニエ盲学校長へのものだった。ピニエは志半ばで副校長デュフォーに失脚させられてしまうが、ルイにとっては恩師の一人として長く心の支えとなったようだ。書簡は自ら書いたり人に書いてもらうなどいくつかの方法で書かれているが、どの方法でも自分では推敲ができないため、要点がたどたどしく書かれているという印象が拭えない。しかし、「盲人にも社会の良識を」というピニエ校長の信念によりパリ社交界にも出入りが叶ったルイは、手紙の末尾に校長への恭しい挨拶を毎回欠かさず述べる「紳士のたしなみ」をしっかりと身に付けている。ある手紙の末尾を訳してみると、こんなふうだ。

「私の敬愛と真摯な気持ちをここにお伝えいたします。また両親、兄、姉も、私同様の気持ちでおりますことをお記し申し上げます。あなた様を尊敬して止まない教え子より」

友人から金銭に関する相談を受けたことや、結核療養のためにしばしば帰省した故郷クープレーの気候、ピアノを弾いたり歌を教えるなど人々と楽しく過ごしている休暇の様子、モーという所の教会オルガニストが死亡してこのポストが空席になったので後任に応募してみた話など、手紙には日常の近況が手短かに記されている。ただ残念ながら、テーマの中心がいつも「自分」ではなく「隣人」であること以外、彼の心情を直接読み取れる文面は多くない。

そんななかで、伝記に強調されている彼の信仰心、あるいは人生の達観を思わせる短い一節を見つけた。書簡の周辺資料がまったくないことと、前後にヒントになる言及がないため、誤訳の危険を覚悟のうえというご容赦をいただいた試訳であることをお断りして、訳出してみよう。

「悲しいことに、ボドワンもおそらくぼくと同じで、この種の幸福には恵まれない気の毒な青年の一人なのでしょう。ぼくに関してはほかの人ほどこの障害に苦しんではおりませんが、それが他人より軽いというわけではありません」(1833年10月22日、

クープレーにて)

詳細に誤解釈があるとしても、とにかくルイがボドワンという人のために心を痛み、自分はおそらく信仰によって達観できたが、それができずに悲しい運命に苦しむ人の気持ちを共感していることは、間違いないような気がする。

もう一つ触れたいのは、ここでルイが「ぼくらにはその幸福がない」といっていることだ。時折、視覚障害は不幸か否かという話題が出る。不便だが不幸ではないという人もいれば、それはごまかしでやはり不幸だという人もいる。ルイは「不幸」と言い切ってこそいないが「幸福にめぐまれなかった」と書き、失明は「一種の幸福を失うこと」と位置付けているように読める。だが実際には、手紙の随所に恩師の寛大な措置や仲間の友情、家族の愛に包まれていることに幸福感と感謝を表している。言わば、失明は目が見えることと比べればある種の幸福の欠如ではあるけれども、人間として本質的な幸福を失ったとは考えていないと受け取れるのである。これは、幸福とか不幸という感情に囚われない、また「視覚障害とは」という一元的な定義に閉じこもらない、実に現実的で前向きな人生観ではないだろうか。

この人生観の源は、旺盛な知的好奇心と、奉仕する精神であったように私は思う。自分にできることを見つけて貢献するというのは、障害の有無にかかわらず人間として理想の振る舞いではあるまいか。幸福か不幸かという議論で立ち止まることなく、確固たる人生観に基づいて行動を続けたルイの生き方を見ると、心満たされた人生を生きられる人は、彼のように生きるものなのではないかと思えてくる。厳しい状況にあっても、そこでできることを淡々と実践したルイの生き方に、私は限らない尊敬をおぼえるのだ。

ルイはまた、良い家族にめぐまれた。彼が愛されていたからだけではなく、父親が彼の失明に絶望しなかったからだ。当時、失明すれば物乞いか見世物に身をやつすしか生活の術がなかったと、伝記には書かれている。しかしルイの父シモンは、見えなくなったのだから仕方がないとは考えなかった。かえって、可愛い我が子に辛い思いをさせてたまるかとはばかりに、当時職人の子どもにはなかなか許されなかった高等教育をルイに受けさせる決意をする。自活のためなら何でも仕込んでやりたいという親心は、私を含め、親の苦労を見ながら育ててもらった経験に照らせば多くの人が共感できるのではあるまいか。

シモンはまず、職人らしく、息子に手探りで物を作ることを教える。その訓練は盲学校でも活かされ、ルイは商品として販売できるほど立派なスリッパなども作れたという。この器用さは、点字の筆記用具の考案にも大いに役立ったに違いない。ルイが並外れた頭脳とともに、親譲りの技術と根気を持ち合わせていたことがまさしく、世界中の「風景をもたない人」たちに「文明の扉を開くカギ」となる文字をもたらしたのである。

とは言え、その父をしてそのような考え方に至らしめたのが幼いルイの人徳であったことも本当だと思う。障害という境遇に呑まれなかった時点で、ルイ親子は、すでに障害に勝っていたと言えるだろう。

私が卒業した筑波大学附属盲学校の校歌に、こんな歌詞がある。

「広き世界の海山も、撫づれば指に明らけし。深き心を解く文字も、探れば胸に移り来ぬ」

小学生のころ、この詩にいたく感動した思い出がある。広い世界のことも、難しい学問も、点字をたどり、胸に刻んでいけば、こんな私にも分かる日がくるかもしれない。点字があるのだから……。あの歌は、失明という失意のなかにあった一人の子どもの心を励まし、大きな希望を与えてくれたのだった。

そして、その歌の先にルイ・ブライユがいた。ルイのことをあらためて調べてみて、私は、点字によって時空を超えて文明の末席に参加できることの深い意味を、心から噛み締めるのである。

ルイ・ブライユ生誕200年・石川倉次生誕150年記念 点字ビッグイベント開催

日本点字委員会

ヘレン・ケラーは、もしルイ・ブライユが6点の点字を考案していなければいつまでも暗闇の中に取り残され、文明や文化の光を獲得出来なかったと言っている。そのルイ・ブライユの生誕200年の誕生日にあたる2009年1月4日から8日まで、パリのユネスコ本部ほかで、生誕200年のイベントが世界中から数百人の人が集まり、盛大に行なわれた。日本点字委員会から、指田忠司^{さしだ ちゅうじ} WBU-AP 会長が「普通選挙の点字投票と選挙広報」、田中徹二^{てつじ}日本点字図書館理事長が「日本語の点字」を発表した。

また、その6点点字を点字仮名に翻案した石川倉次は、1月26日が生誕150年にあたる。この二人の生誕を記念して、日本点字制定の日である11月1日（日）と、その前日の10月31日（土）に点字ビッグイベントを開催した。主催は、社会福祉法人日本盲人会連合（日盲連）・社会福祉法人日本盲人社会福祉施設協議会（日盲社協）・全国盲学校長会で構成している社会福祉法人日本盲人福祉委員会（日盲委）と日本点字委員会。後援には、厚生労働省・文部科学省・特定非営利活動法人全国視覚障害者情報提供施設協会（全視情協）とマスコミ各社の社会事業団に依頼した。会場は、戸山サンライズ（全国障害者総合福祉センター）。

1日目の10月31日は、午後1時半から、主催者を代表して笹川吉彦^{ささがわよしひこ}日盲委理事長のイベント開始の挨拶と、点字競技会の競技内容と方法について田中徹二審査委員長からの説明が行われた。引き続いて「聞き書き」と「写し書き」（いずれも2分間）が持参の点字盤で一斉に行われた。参加者は47名であった。

午後2時からの記念講演は、阿佐博日点委顧問の「ルイ・ブライユと石川倉次」。講師の紹介は、木塚泰弘日点委会長。講演内容の詳細は、本誌冒頭の「ルイ・ブライユと石川倉次」を参照されたい。

ビッグイベントの期間中、会場2階の会議室では、「点字資料展」が行われていた。テーマは「日本語は一つ、文字は二つ～指でたどる真・善・美の楽しさ」。主な展示品は、点字以前の文字5点（結び文字、通心玉、ろう盤文字、瓦文字、木刻漆塗文字）、凸字教科書2点（版木〔小学生徒心得1ページ目〕、版木〔活字式のもの〕）、

点字11点（バルビエの点字、ブライユの顔、日本点字工夫の第一歩、イシカハ・ライター、日本点字の翻案〔石川倉次案〕、日本点字の翻案、日本最初期の点字盤、選挙投票用点字盤、フランス式点字盤、イギリス式点字盤、点字製版機）、最初の点字の出版（点字新聞あけぼの、点字毎日創刊号、日本最初の点字雑誌「むつぼしのひかり」）、最初のころの点字教科書2点（『高等小学読本』『小学日本地理』）、戦後の機器2点（オプタコン、点字データタイプライター第1号機）、アメリカの点字。「点字資料展」は、記念講演後5時過ぎまで盛況であった。それは2日目の午前中にも引き継がれていた。

2日目の11月1日は、午前9時半から10時半まで「速読み」の競技（一人ずつ1分間）が行われた。

11時過ぎに30分間ほど田中禎一氏（キーボード演奏）と渡辺勇喜三氏とで式典で歌う、1901（明治34）年官報に掲載された「訓盲点字採用十年記念唱歌（ルイ・ブライユと石川倉次を讃える歌）」（小西信八作詞、小山作之助作曲）の練習を行った。

午後1時からの記念式典は、澤田晋校長会長が開会の辞を述べ、「訓盲点字採用十年記念唱歌」を渡辺・田中両氏にあわせて歌った。笹川吉彦日盲委理事長が主催者挨拶、木塚泰弘日点委会長が経過報告を述べて表彰に入った。

表彰は、校長会が事前に募集した盲学校小学部と一般の小学生の作文コンクールの部では、最優秀の伊藤美穂さん（盲学校の部／山形県立山形盲学校小学部5年）と出井有名さん（一般の部／岩見沢市立幌向小学校6年）には文部科学大臣賞と副賞、優秀と佳作には全国盲学校長会長賞と副賞が贈られた。また点字競技会の部では、総合と各部門の優勝者（総合・神野一志さん、聞き書き・柴田憲克さん、写し書き・高井史子さん、速読み・藤原健司さん）には厚生労働副大臣賞と副賞が、準優勝と第3位には日本盲人福祉委員会理事長賞と副賞が贈られた。講評は、それぞれの審査委員長である澤田晋校長会長と、田中徹二日本点字図書館理事長が行った。

次に最優秀者の朗読が行われた。伊藤美穂さんは、自分が書いた作文をまるで弁論大会の発表のようにメリハリをつけて見事に読み上げた。出井有名さんは、自販機や券売機から点字に興味を持ち、札幌盲学校の先生をしている父から、ルイ・ブライユの伝記や石川倉次の伝記を貸してもらい、二人とも素晴らしい人だと思ったと素直に読み上げた。速読み最優秀者京都府の藤原健司さんは、1分間で630字と2倍速のデージー録音を聞くような感じでたんたんと読んで皆を驚かせていた。口の動きに制限されて、実はもっと指では速く読んでいるのではないかと思われた。

式典では、海外点字普及支援の披露も行われた。発展途上国のアジアには6行書きの携帯用点字器を、アフリカには4行書き28マスの携帯用大点字器を、22カ国に各国100台ずつ、1万枚の点字紙と点字の絵本10冊を添えて贈った。代表として、カメルーン駐日大使館1等書記官のコメワングさんが受け取った。

厚生労働副大臣と文部科学大臣の祝辞は、それぞれの担当官から披露された。

式典内での記念講演は、点字毎日が主催する「オンキョー点字作文コンクール」の第1回から審査委員長を続けている藤本義一氏の「表現の深さ」。講師の紹介は、岡田満里子点字毎日編集長。講演は冒頭「文章の読みや書きはひとりひとり違い、皆それぞれに素晴らしいのに、競争のように順位をつけたり、金・銀・銅のメダルを副賞に出したり、速く読めても人に気持ちが伝わらなければ意味がない。祝辞も代読でなくて、自分の言葉で原稿を持たずに話しかけるものだ」と今回の表彰などについてぶつちぎりの批評をしてから本論に入った。自分の55年の文筆生活を振り返っていまだに掴めないという表現の奥深さ、面白さを語り、「読むときも書くときも話すときも、相手の気持ちを動かすものでなければだめだ。自分は物書きだが、書くときは表面の現象にとらわれるのではなく、まず冷静にならなければならない。すると純粹になる。しかしなかなか人に理解されずに孤独感におそわれる。その果てに死ぬか生きるかの問題にぶつかるものだ」と表現の深さについて、あくなき追究をしている立場を述べていた。最後に今回の受賞を一つの指針として、今後の人生を歩んで欲しいと受賞者にエールを送って結んだ。

最後に茂木幹央^{もぎみきお}日盲社協理事長の閉会の辞で点字ビッグイベントは終わった。

このほか日盲委では、今回のビッグイベントを記念して切手シートを発行した。ルイ・ブライユ、石川倉次をはじめ10種の80円切手を1枚に収めたシートで、1シート1200円。

このビッグイベントの開催に当たっては、日盲委との間で実行委員会が結成され、日盲委からは木塚泰弘会長と当山啓^{とうやまひろく}事務局長が参画した。委員会は、2009年3月から11月にかけて5回行われた。また点字競技会の実施に当たっては、田中徹二副会長ほか委員・事務局員が、点字資料展には高橋秀治^{ひではる}委員が協力した。

(文責・木塚泰弘)

マイケル・メラー氏の講演「ルイ・ブライユのすべて」

(2009年11月28日、日本点字図書館にて)

国立民族学博物館での国際シンポジウム「点字力の可能性」を機会に、マイケル・メラー(C. Michael Mellor)氏が来日されました。ルイ・ブライユ研究の第一人者として知られるメラー氏に、日点委としても講演をお願いしました。以下はその概要です。

メラー氏はイギリス出身、高校卒業と同時に空軍に入隊、その後リーズ大学(the University of Leeds)で科学史の修士号を取得されています。アメリカ移住後は点字雑誌の編集に関わり、ブライユの直筆の手紙がパリ盲学校で発見されたことを知りました。世界的に読まれている「マチルダ・ジグラー(Matilda Ziegler Magazine for the Blind)」の編集長を最後に2002年に退職。以後ブライユ研究を本格化させ、2006年に、新しく発見された手紙なども史料に加えた伝記『ルイ・ブライユ——天才の手法(Louis Braille – Touch of Genius)』を完成させています。この本は、フランス語、中国語、南アフリカのアフリカーンス語、スリランカのシンハラ語にも翻訳され、イタリア語、日本語版の出版も計画されています。

Konnichiwa.

日本に来ることができて大変うれしく思います。イギリスにいた若いころ、日本の歴史と文化について勉強したことがあります。ついに日本に来られてうれしいです。これもブライユのおかげです。ブライユの本を書くことがなければ、日本に来る縁も生まれませんでした。

【誕生】

ルイ・ブライユは、1809年1月4日に生まれました。パリ(Paris)から東に40キロほど行ったクーブレ村(Coupry)の家の台所で生まれました。ブライユ家の質素な家では、ベッドを台所に置いていたのです。一月余り後の2月12日に二人の赤ちゃん、アメリカ大統領リンカーン(Abraham Lincoln)と、進化論で知られるダーウィン(Charles Robert Darwin)も生まれています。

ルイは大変体が弱く、お乳もなかなか飲みませんでした。敬虔なカトリック教徒である両親は、幼ない我が子がもし死んでしまっても天国に行けるよう、すぐに洗礼を受けさせました。母は39歳、当時としては熟年といったところ、父は44歳でした。

両親はこの息子を愛しました。年老いたら自分たちの面倒を見てもらいたいと思っていました。聖書の中に登場する、ヤコブ(Jacob)の年老いてから授かった子どもにちなんで「ベンジャミン(Benjamin)」と呼んでかわいがりました。

ブライユー家は、勤勉で質素な生活をしていました。これはルイの生涯にも引き継がれています。

父は、手綱、皮のストラップ、真鍮の止め具といった馬の道具を作る素晴らしい技術の持ち主で、27歳で名人の称号を得ています。農業中心の村では多くの人たちが彼の技術を頼りにしていたので、ブライユー家は有名でした。父親の仕事が主な収入源でしたが、何年もかけて農地も広げ、自給自足の生活を営んでいました。子どもたちも、両親を手伝いました。

当時のフランスは戦争の真っ只中で、ルイの子ども時代は大変でした。兵士たちが家に寝泊まりすることもありました。中にはフランス語を話せない者もいました。乱暴で、一番良い食べものを要求したり、寒いからといって家具を燃やして暖を取ることでさえあったのです。それでも、両親、兄、二人の姉の中で、ルイは愛情を疑うことなく育ちました。利発で、好奇心にあふれた子で、父親譲りの敬虔さを兼ね備えていました。

【悲惨な事故】

3歳の時、ルイは作業場で父の真似をしていました。事実は分かっていませんが、右目に先の尖った道具が突き刺さったのです。顔の近くに皮を置いて道具を使おうとして、それが滑ったのでしょう。百合の花から取った汁で目を洗うと良いと教えてくれた人がただけで、誰も治療法を知りませんでした。

炎症による痛みが続いて、5歳の時には両目を失明しました。右目は不透明になり、左目も濁り青い筋が入っていました。左目は、交感神経性の眼炎によって失明してしまったものと思われます。現在では自己免疫疾患として知られているものです。悪い方の目を摘出していれば、良い方の目は失明しなかったかもしれません。

両親は悲しんだことでしょう。彼らが知っているクーブレの二人の盲人は、極貧の生活をしていましたのでから。

ルイは故郷が大好きでした。パリに出てからも、病気が重くなると村に帰ってきました。いつまでもカントリーボーイだったのです。それは1847年に家族に宛てた手紙にも表れています。そのころには彼の健康はひどく悪化していました。

【教育】

ルイの失明後も、両親は彼に教育を受けさせようと決めました。両親は読み書きができました。兄の書いた手紙も残っています。

ルイは頭が良いので、パリュイ(Jacques Palluy)神父に勉強を見てもらうことにしました。愛、慈善心、慎み深さなどが彼の精神に刻まれていきました。フランス革命は教会を軽蔑し、すべてを否定しましたが、ルイは敬虔なカトリック教徒でした。

彼の進歩が素晴らしいので、地元の学校に入学することになりました。男の子と一緒に険しい丘を登って学校に通いました。ルイについて、ベシュレ(Antoine Bècheret)は、「的を射ていておもしろい答えをするので、私はあっけにと取られてしまった」と書いています。

残念ながら、この素晴らしい環境は長くは続きませんでした。革命で教育制度が変わり、両親やベシュレは、学校が反キリスト教になってしまったと不満を持ちました。

ベシュレは、盲学校があることを知っていました。地元の領主がその盲学校を援助しているという縁もあったようです。1819年2月15日、ルイは父とともに乗り合い馬車に4時間揺られ、パリに向かったのです。10歳になったばかりのルイは王立盲学校(L'Institut National de Jeunes Aveugles)に入学したのです。旅費はクーブレ市が出してくれたのだと思います。

【盲学校での生活】

ルイが入学したころの校舎は何百年も前に建てられたものでした。男女を分けやすい構造をしていたという理由でそんな建て物が使われていたのです。フランス革命以前は神学校でした。貧しい人たちの救済で知られるラザリスト会の創始者サン・バンサン・ドポール(Saint-Vincent-de-Paul)も住んでいたことがあります。革命中の1892年、主にまだ10代の修道士たちが窓から中庭に放り投げられ、それでも死なない人たちは首を切られるという場にもなりました。

セーヌ川(Seine)沿いにあるこの建物はジメジメしていて、壁を触るのも不快でした。水は汚染のひどい川から直接引かれ、入浴は月に1度しかできませんでした。少ない資金の中で短時間に栄養のある料理を作ろうと、最新の圧力鍋も使われました。健康に良いと言われる赤ワインは十分には使えませんでした。ゴミの収集場所からはひどい臭いがしていましたが、これは換気が良くなって改善されたようです。

当時は他の学校もそうでしたが、この学校でも罰は厳しく行われました。鎖でつな

がれてパンと水しか与えられなかったり、女の子でさえもむちで打たれました。活発なルイもきっとそのような罰を受けたでしょう。

1821年に着任した新しい校長ピニエ(Alexandre François-Renè Pignier)は、生徒たちの死人のような顔色、結核の容貌、リンパ腺の腫れた子、女子に多い消化不良などの生徒の様子を報告しています。このような環境の中で、証拠はありませんが、ルイも結核に罹ったのでしょう。

学校はあまり大きくなく、男子60名、女子30名でした。1日15時間が作業や礼拝に当てられました。卒業後に生計が立てられるよう、その生徒の故郷も考慮した各種の商売も教えられました。器用なルイは、14歳の時にスリッパ工房の監督になっています。

学校には楽しいこともありました。アメリカのボストン(Bostone)に現・パーキンズ盲学校(Perkins School for the Blind)を創設するハウ(Samuel Gridely Howe)は、事前調査のためにパリ盲学校を訪れ、見えない男子生徒が、見える者と変わらず戸外で遊んでいる様子に感動しています。

【音楽教育】

学校には多くの欠点がありましたが、音楽教育は素晴らしいものでした。バイオリンの巨匠パガニーニ(Niccolò Paganini)は、「盲学校生徒たちの合唱ほど完璧なものを、これまで聞いたことがない」と述べています。

生徒たちの将来の仕事の一つはピアノ調律でした。ルイもその技術は持ってはいましたが、調律の仕事は好きではなかったようです。

盲学校で雇った晴眼の調律師の腕が悪く、生徒たちがピアノを分解し、きれいな音が出るように見事に組み立ててしまったことがありました。調律師が文句を言ったのでピニエは生徒たちに2度としないように注意したのですが、その能力に感心して、やがて学校のオルガンの調律をやらせるようになっていきました。男子の60%は音楽関連の仕事に付き、その半分は調律師でした。

学校には印刷機を改造した、浮き出し文字が印刷できる機械がありました。点字以前には、触って読める文字はこれしかなかったのです。印刷機を使って、生徒たちは普通の墨字本も完璧に作ることもできたので、印刷の仕事は学校の主要な収入源でした。アルファベットを触読することは難しいのですが、ルイはそれができた数少ない一人でした。

書くことは更に困難です。銅板を鉄筆でなぞって手の動きを覚え、それを紙の上に再現できるようにするのは、4, 5人の人しかできませんでしたが、ここでもルイはそれができる一人でした。彼の直筆は完全に読むことができます。

ルイの優秀さを、ピニエは「キビキビとしていて器用、頭の回転が良く、健全な精神の持ち主、国語も理科もできて、いつも明確に考えを述べることができる」と評しています。

多くの優秀賞を与えられました。ピアノも優秀でした。ある表彰式では、積み上げられた賞状がルイよりも高くなったこともありました。彼の身長は高くはありませんでしたが。

【点字の誕生】

1820年のバルビエ(Nicolas-Marie-Charles Barbier de la Serre)の盲学校訪問は、ルイ・ブライユと世界中の視覚障害者たちの人生を変えました。彼は砲兵隊長でしたが、フランス革命が起きてアメリカに逃れ、測量技師として生計を立てていた時、アメリカ原住民たちと暮らしたこともあります。そこでアルファベット以外の文字を学んだのかもしれませんが。小さい点筆で穴をあけて字を書くことを考案しました。暗闇でも、触覚で兵士たちが読めることを目指した「夜間文字(écriture nocturne)」が実際に軍隊で使われたかどうか定かではありませんが、見えない人たちにも使えるのではと盲学校へそのアイデアを持ってきたのです。

当時の校長は、彼におざなりな対応しかしませんでした。しかしこの校長は音楽教師との不適切な関係を持ったということで間もなく解雇されたので、バルビエの再訪を出迎えたのはピニエでした。彼は、生徒たちに実際にバルビエのシステムを試させることにしたのです。

バルビエのコードは、2×6の12点からなっています。その点が6列6行の、フランス語の発音を表した表の中の位置を指し示していて、点の数が、左の列は何行目かを、右の列は何列目かを表します。句読点もないし、数字やもちろん楽譜もありません。この表は、見えない生徒たちにはすぐに覚えられたでしょう。

バルビエに改善策を提示したのはルイでした。10代の少年に言われて、バルビエの心中は穏やかではなかったでしょう。

ルイは勉強をおろそかにはしませんでした。自分のシステムの改善に取り組みました。夏休みに帰郷している時は、外に出て座り込んでよく考えました。寒い時や眠

れない時には、点字盤、点筆と紙はベッドの中にも持ち込みました。改良を重ねつつでき上がったものなので、いつできたとはっきり言えるようなものではありませんが、1824年、15歳の時には点字コードの本質的な部分は完成していました。何にもとらわれない若さが、独想的な開発につながったのでしょう。「そんなことは無理だと言っている間に、それはもう誰かが成し遂げている」と言ったヘレン・ケラー(Helen Keller)の言葉を思い出します。

ルイはバルビエと知り合いになり、バルビエはルイの努力を賞賛しています。ルイは、バルビエに相談の手紙も書いています。

【教師に】

ルイは素晴らしい教育を受けた学校を去らずに、19歳の時に復習教師(répétiteur)になりました。教師の教えた内容を生徒たちに何度も説明してやるのです。自分の部屋も与えられました。1835年まで、彼は文法と地理を、見えない生徒にも晴眼の生徒(見えない生徒を手伝うことを条件にただで勉強していた)に教え、その後は専ら見えない生徒だけに、文法、綴り方、地理、歴史、読み方、代数、幾何までも教えました。彼は、見えない生徒に数学を教える方法についても書いています。

24歳で正式な教師になりました。給料ももらうようになりました。学問のシンボルである、絹や金箔で作られたシュロの葉のマークが襟元についた制服を、少年に手を引かれて町を歩く時も、教会に出かける時も着ていました。

ルイは、古代ローマの風紀の取締役になぞらえて「監察官(censeur)」と呼ばれていました。生徒たちに対して罰を加える役も進んで引き受けました。一方、生徒に人気はありました。ブライユ先生を喜ばせようと生徒たちも勉強に励みました。

彼は気のきいたことを言う人として知られていましたが、その例は残っていません。ラテン語も知っていました。いかに書くためのスペースを節約するかという話をしている時、ローマの著述家セネカ(Seneca)の「文章は、意味以上に音の羅列になっている」という句を言い換えて、自分の文章に「単語以上に意味を」盛り込みたいと言っています。

彼は自分自身に注意が向けられることを嫌い、良いことでもこっそりと行いました。一方、有益だと思うことは何でも進んでやる人でした。礼儀正しい人でもありました。

現実離れた教育者ではなく、ビジネス感覚にも優れていました。クーブレで鉄道工事が始まった時、線路を通すために売った土地のお金で土地を買い足し、兄に耕作

させています。ある手紙では、為替でもらっている年金を最も良いレートで受け取れる方法をアドバイスしています。学校に聖歌隊を頼んだのに料金が払われず、その督促方法についても校長に助言しています。

【父の死】

1831年5月31日に、ルイは父親を亡くしました。死の前日に兄が書いた手紙によると、父は今後もルイを見捨てないようにピニエ校長にお願いしていたといっています。ピニエは、言われる前からそのつもりでいたと返信しています。

残っていた22通の手紙が盲学校から出版されています。10通はルイが手書きしたもので、彼は大文字は使いませんでした。句読点やアクセント記号もあり、非常に読みやすいものです。見える人に書き取らせた8通は、ルイが発音した通りに書いていて、字も汚く、読みにくいものです。単語の切れ続きも曖昧です。書いてあるまをを発音してみるとようやく分かってくるというものです。4通はラフィグラフィー (raphigraphe) によるもので、触っても読めるように、点によって墨字を書いたものです。加えて、ルイの兄自身が書いたもの2通も含まれています。

ルイはおしゃべりだったので、ある手紙ではピニエに「静かにしなさいなんて言わないでくださいね」と書いています。

【ルイと音楽】

ルイは、ピニエとの繋がりによって、社交界にも参加しました。ピアノを弾いて人々の涙を誘いましたが、彼は哀れまれることは嫌いました。帰りに彼を手引きしたのは、ピニエの妹でした。ルイは、パリの警視総監で後にフランス大法官になったパスキエ (Etienne-Denis Pasquier) とも知り合いました。

ルイには音楽の才能があり、チェロ、オルガン、ピアノを弾きました。おそらく友人に頼まれたので、点字のアルファベットに加えて、彼は楽譜を点で表すことを考えるようになりました。1829年、20歳の時に、それを『言葉、音楽、単旋律聖歌を盲人のために点で書き表す方法 (Procède pour discire les paroles, la musique et le plain-chant au moyen de points, à l'usage des aveugles, et disposé pour eux)』として出版しました。音譜は点によって表されているのですが、この時はまだ歌詞は浮き出し文字でした。ミズーリ盲教育者協会 (the Missouri Institution for the Education of the Blind) の音楽教師ニューコム (Fred Neukomm) は、ブライユが楽譜点字を作ったことは賞賛することが不可能なほど素晴らしい、と1866年に述べています。

1832年に、彼は転職を考えたようです。素晴らしいオルガンで知られるモー(Meaux)のサン・エティネ大聖堂(Saint-Etienne)のオルガニストにという名誉ある話があったのです。クーブレはモーの管区であり、1826年から司祭を努めていたのは、ルイの最初の教師であるパリュイだったのです。

結局、ルイはこの仕事を断りました。モーの高い物価は給料に見合わない。またオルガニストとしての仕事以外に、好きではないピアノ調律の仕事や、社交パーティーへ出張して演奏するというようなことも含まれていました。出張の際にはひどい宿に泊まらなければならないことも嫌でした。

【新たな発明——ラフィグラフィー】

盲学校の生徒は1年のほとんどを家族と離れて暮らします。しかし、見えない者が手紙で連絡を取り合うのは困難です。読んだり書いたりするには見える人の助けを借りなければなりませんでした。

ルイは、10×10の点字と同じ大きさの点で墨字の形を描く「デカポイント(deca-point)」という方法を考案しましたが、紙には少しの文字しか書けず、また点の位置を決める特別な道具も必要でした。機械に詳しいフーコー(Pierre-François-Victor Foucault)との出会いによってラフィグラフィーが生まれ、文字の小型化・機械化に成功したのです。点を書く機械のハードウェアはフーコー、どの点で文字を作るかのソフトウェアはルイの担当でした。後に、カーボン紙を間に入れることで、点に加えて、書いた文字が黒く打ち出されるようにもなりました。

タイプライターが登場する1870年代までの30年余りの間、墨字はラフィグラフィーによって書くことが、見えない者にとって最良の方法でした。ドイツとスペインでも販売されています。ルイが亡くなる1カ月ほど前、1851年のロンドンでの博覧会ではフーコーがデモを行い、メダルを得ています。

【点字の禁止】

1840年にピニエは解雇されました。共和派の副校長だったデュフォー(Pierre-Armand Dufau)が政治家と謀って行なった背信行為によるものです。学校で宗教を教え、卒業生たちを教会のオルガニストとして送り込んでいるといった理由でした。確かに、ピニエは教会との強い繋がりがありました。浮き出し文字になっている本の中には数カ国語で書かれた「主の祈り」があり、点字で作られた初めての3巻にもわたる本は、カトリックの神父によって書かれた歴史の本でした。

デュフォーは校長に就任すると、楽譜以外の点字の使用を禁止しました。ピニエの弟子であるルイにも好意的ではないでしょう。しかし、1844年の新校舎の落成式で、点字に対する正当な評価を勝ち取ることになります。

副校長として迎えられたガデ(Joseph Guadet)は、点字を生徒たちがこっそり使っていることや、フランス史の本をページを破り取って皆で読んでいることを知っていました。そこで落成式の式典の場で、集まった人々の前でデモを行い、点字での読み書きの正確さを示したのです。

【体調悪化】

同じ年に、治療のために訪れていたオーベルニュ(Auvergne)のシャマリエール(Chamalières)からルイがピニエにラフィグラフィで書いた手紙は、最も長いものです。自分の病気がもう良くなるまいという現実を彼は分かっていました。

ルイの健康は悪化していきます。ピニエの友人である医師は厳しい節制を命じましたが、ルイは不満でした。受け持つ授業数は減りましたが、年金は安いので、給料は維持されました。全く教えられない時もありました。調子の良い時は音楽を教えました。弱々しい声で、ひどく咳込むこともありました。

1851年の12月初めに咯血し、保健室に運ばれました。神父が呼ばれ、聖餐式が行われました。翌日は容態が少し良くなって、ルイは「昨日は素晴らしい経験をした、宗教の偉大さが分かった。そして、地上での任務が終わったことを確認したのに、またここにいるなんて、祈りが足りなかったかな」と。ユーモアを失わない人でした。

1852年の1月6日、小旅行にでも出かけるかのように、彼はこの世を旅立っていきました。

【遺産】

ルイの遺言を知ると、彼のことがもっとよく分かります。少し貯えはありましたが、裕福ではありませんでした。

残された母親に生涯年金が行くように手配しました。その他の証券は、名付け親でもある姪、そして甥に残されました。

遺産の大部分は盲学校に寄付され、卒業生たちの仕事探しに使われました。成人視覚障害者の自立を支援する協会にも寄付されました。宣教活動支援もしています。浮き出し文字の書物の出版事業をしている、メッツ(Metz)のチャンピオン(Champion)婦人にも。ルイの葬儀費用と、クープレの教会のためにも少額の遺産が当てられまし

た。友人のコルタ (Hippolyte Coltat) には、預金と、学校内にあったすべてのルイの私物が贈られました。

最後に残った少額の遺産には彼の思いやりがよく現われていて、盲学校の警備員、手引きをしてくれた少年にも配分されています。

ルイは特に科学分野の才能に秀でていて、遺品の中には科学に関する道具もあったそうです。何だったかは分かっていません。電気で有名なアンペール (André-Marie Ampère) も近くに住んでいましたから、交流があったとしても不思議ではありません。

「開けずに焼き捨てるように」と書かれた謎めいた箱がありました。ルイの願いに反して開けられてしまったのですが、中にはルイが貸した金の借用書が入っていました。借金は帳消しにするというルイの遺言だったのです。ルイの人柄がしのばれる逸話です。

【遺骨、パンテオンへ】

1952年、ルイと母・姉の眠るクーブレの墓は掘り起こされ、ルイの骨はパンテオン (Pantheon) に移されました。クーブレでは、大事なルイ・ブライユの遺品を残したいと主張した結果、手だけはクーブレに残ることになりました。棺を運ぶ列には白杖の長い列が続いたことを「ニューヨーク・タイムズ (New York Times)」は報道しています。ヘレン・ケラーは、「ルイ・ブライユが盲人にとってのグーテンベルクである」と言いました。

私が2006年に出版した本をお読みいただくと、詳細が分かっていただけだと思います。

【まとめ】

新技術によって点字はなくなるのだと言う人がアメリカにもいますが、それは間違っています。私が先週参加してきた大阪でのシンポジウムでも、新技術にとって点字はもっと重要なものになるという発言が相次いでいました。技術の進歩で、点字の書物ももっと安価に、作りやすくなっています。

私たちは点字の必要性をもっと主張する努力が大切です。アメリカでは、点字資料を用意することが法律に明記されています。日本では、駅の構内などにたくさん点字表示があるんですね。アメリカに戻ったらこの進んだ状況をぜひ知らせたいですね。

(文責・白井康晴)

ルイ・ブライユ生誕200年記念国際会議

副会長 田中 徹二

ルイ・ブライユの生誕200年を記念して、パリのユネスコ本部で、今年の1月4日から8日まで、国際会議が開催された。フランス共和国大統領がスポンサーとなり、ユネスコ、世界盲人連合（WBU）、ルイ・ブライユ生誕200年記念国際委員会、全国視覚障害者社会促進委員会などが、後援に名前を連ねた。会議の運営は、ボランティア協会と国立盲青少年機関（盲学校）があたり、「6点の文字とその未来」というテーマで、フランス国内あがてのイベントであった。日本からは、WBU アジア太平洋地域会長の指田忠司氏と私が招聘されたが、せっかくの機会なので、年末からパリに行き、市内も観光した。

ご存知のように、1月4日はルイ・ブライユの誕生日である。午前には、彼が卒業し、その後、教員助手、教師として勤めた国立盲学校のチャペルで、各国代表を含む200人ほどが集まり、追悼ミサが催された。午後3時から、フランスの偉人たちが祭られているパンテオンで、彼の業績を讃える講演と、献花の儀式があり、WBUのマリアン・ダイヤモンド会長が生花を供えた。ブライユの遺骨が納められている部屋の前には胸像も置かれ、「Louis Braille 1809～1852」という点字プレートが貼ってあった。フランスで点字が正式に認められたのは、ブライユの死後2年目の1854年。それ以後、世界に点字が広がるにつれ、彼の業績が高く評価されるようになり、死後100年目の1952年に、遺骨が国家の手によってパンテオンに移されたのである。

その夜9時、ノートルダム大聖堂で追悼オルガン・リサイタルが開かれた。一般にも開放されたので、千人を超える聴衆が、ジャン・ピエール・ルゲーの厳かな演奏に聴きいった。地理や歴史といった一般科目のほかに、ピアノ、チェロを教え、日曜には教会でオルガンを弾いていたブライユを偲ぶのにふさわしい演奏会だった。ルゲーは、1985年から大聖堂の首席オルガニストを務めている盲人だが、国立コンサルバトアールの教授も兼ねている巨匠で、5曲を演奏した。ルゲーのもの以外は、すでに亡くなっている作曲家の曲だったが、彼らは、いずれもブライユがいた盲学校の卒業生で、音楽大学で学び、作曲家、編曲家として認められ、教会のオルガニストを務めていた人たちである。盲学校で、いかに音楽教育に力が入れられていたかがわかる。

実質的な会議は、5日から7日までだった。開会式では、バルンタン・アウイ協会理事長、盲学校理事長、イギリスの前大臣のデービッド・ブランケット、ヨーロッパ盲人連合会長、世界盲人連合会長、ユネスコおよびフランス政府代表らの挨拶があった。

続いて、「ルイ・ブライユとその時代」というテーマで、カナダのユークリッド・ヒリー、今回の会議の実質的責任者の一人、バルンタン・アウイ協会のフランソワーズ・マドレイ＝ルシーヌ事務総長、『ルイ・ブライユ——天才の手法』を2006年に著し、ブライユの生涯について、直筆の手紙とともに詳しく紹介したニューヨーク在住のマイケル・メラー氏が話をした。

午後は円卓会議である。前半は「音楽」「数学」「情報技術」の三つに分かれた。私は「情報技術」に出たが、北米点字委員会会長で議会図書館のジュディ・ディクソンが司会進行をした。情報技術の点字表記について各国の状況にふれるのかと思っていたが、情報技術によって点字の製作が進んだことや点字プリンタの性能に終始した。「音楽」のほうの司会は、スウェーデンのキキ・ノードストローム（前WBU会長）。出席者リストにはこれらの人のほかに、オットー・プリッツ（ノールウェイ）、キム・チャールソン（アメリカ）、ウイリアム・ローランド（南アフリカ）など、知っている名前がずらりと並んでいて、さすがに点字の国際会議という感を強くした。

円卓会議の後半は、「触る絵本」「触る芸術」「点字とゲーム」の三つ。私が出た「触る芸術」では、話が始まったのにフランス語だけで通訳がない。発表者がフランス人だけだったので、フランス語だけでするつもりだったようだ。出席者からブーイングが出て、出席者のフランス人が急遽通訳をしてくれて英語を聞くことができたが、指田氏が出た「ゲーム」では、すべてフランス語だけだったという。いかにもフランス風の国際会議だったと言える。

6日は、午前中に「世界のさまざまな言語の点字」というテーマで、まず7か国の言葉話すペドロ・スリータ（スペイン）が世界の点字について概括し、続いて私が「日本語点字」について紹介した。わが国にブライユの6点点字がどのように紹介されたか、それに着目した小西信人が生徒に試し導入を決断し、最終的に石川倉次の翻案が公式に採択されたことなどについて話した。さらに、50音がどのような構成になっているかなど、日本点字について詳しく説明したが、原稿を読んでいる途中で、こんなことを話してもほとんどの人はわかっていないのではないかと疑心暗鬼になった。スリータの概括があまりにもあっさりしていたせいでもある。「花と鼻が同じ音

なのに、どうしてわかるのか？」という質問があったが、context（文脈）という単語がとっさに思い出せず言葉の壁を痛感した。

私に続いて、サウジ・アラビアからアラビア語点字、ロシアからスラブ語系点字について、さらに、盲ろう者と点字について、世界盲ろう者協会会長のレックス・グラディンディアが発表した。午後は「点字の統一」をテーマとして、フランス、タイ、ノールウェイ、アメリカ、イタリアから発表があり、さらに「途上国からの視点」として、トーゴ、チュニジア、ベニン、カメルーンからの報告があった。

7日の午前中は、「新技術と点字、拡大か、競争か」を議題に、科学研究、職業、学校教育などの各場面での点字について、午後は「日常生活の中での点字」をめぐる円卓会議で、社会統合と雇用の場での点字が取り上げられた。その中で、指田氏が80年に及ぶわが国の点字投票や選挙公報の取り組みについて述べ、大きな関心を呼んだが、発表時間がわずかに10分しかなかったのは残念だった。私は参加しなかったが、「子供と点字」の円卓会議も、スペイン盲人協会によって、同時進行していた。

このあと、閉会式になり、WBUのダイヤモンド会長の全体的なまとめ、最後をWBUのローランド前会長がしめくくった。その夜は、パリ市長の招待による晩餐会である。市庁舎のレストランが会場で、市長自ら出席し挨拶した。

最終日の8日は、「ルイ・ブライユの足跡をたどる」ということで、まず盲学校を訪れて、「ルイ・ブライユの生涯と仕事」という特別企画展と、学校構内を見学することができた。現役英語教師の案内で、ブライユが音楽を教えていた教室や、現在ただ一つ残っている職業教育のピアノ調律室も見た。また、企画展では、ブライユが考案したという墨字を印字できるデカポイントや、ブライユが着用していた教師用の服、学校のミニチュア等を触ることができた。

午後は、ブライユの生家、クープレイ村にある記念館へ、バスで移動。大勢で行ったので、詳しく見て回る時間がなかったが、日本点字制定100年を記念して日点委が企画した訪問ツアーで訪ねたときとほとんど変わっていなかったように思う。お土産の店で、日点が開発した6行書きのN632小型点字器を20ユーロで売っていたのには驚いた。どこかの国の人に「これは日本ではいくらか？」と聞かれたので、「8ユーロ」と答えたが、ときどき注文が来ることをみると、けっこう売れているようである。

今回の会議に出席して、ブライユの業績に触れる機会を得て、改めて彼の偉大さを痛感した。それと同時に、フランスが国をあげて彼の業績を高く評価し、誇りにしていることを知り、たいへんうらやましく思った。

ルイ・ブライユ生誕200年記念国際会議に参加して

社会福祉法人日本盲人福祉委員会評議員 さしだ 指田 ちゅうじ 忠司

1. はじめに

今年1月5日から7日まで、フランスの首都パリにあるユネスコ（国連教育科学文化機関）本部の会議場で「ルイ・ブライユ生誕200年記念国際会議」が開かれた。この会議は、現在世界中で広く使われている6点点字（ブライユ点字）の考案者、ルイ・ブライユ（1809～1852）の生誕200年を記念して、ルイ・ブライユの生涯と業績を振り返るとともに、現代の視覚障害者にとっての点字の意義と今後の課題について検討することを目的に、フランス国内の関係団体が企画した国際会議で、フランス政府やパリ市当局、ユネスコ、WBU（世界盲人連合）などの協賛・後援で開催された。会議には世界46カ国から400人以上の視覚障害者が参加したが、会場はフランス国内の参加者と誘導ボランティアやスタッフを含めて約1千人の参加者であふれた。日本からは日本点字図書館の田中徹二理事長と筆者が招待され、全体会と分科会で報告に立ったが、このほか、筑波大学や盲学校関係者など、視覚障害教育の専門家や点訳ボランティアなど10数人がオブザーバーとして参加した。以下、会議の概要と関連イベントの様相について紹介したい。

2. 三つのイベント

会議は1月5日（月）～7日（水）の3日間にわたって開かれたが、開会前日の1月4日（日）がルイ・ブライユの誕生日にあたることから、その記念行事が行われた。まず午前中は、ルイ・ブライユの母校、国立パリ盲学校のチャペルで記念ミサがあり、午後にはルイ・ブライユが埋葬されているパンテオンでの礼拝、そして夕方には、ノートルダム寺院大聖堂でオルガン演奏が行われた。筆者は、夕方のオルガン演奏のみを聴いたが、大聖堂のパイプオルガンによる迫力ある演奏は内外から集まった1千人近くの聴衆の心に染み渡る美しい音色であった。演奏者は、同寺院専属のオルガニスト、ジャン・ピエール・ルゲー氏（全盲、69歳）で、夕方9時から始まったコンサートでは、19世紀から20世紀に活躍した盲人音楽家（オルガン奏者、作曲家）4人と、演奏者自身の作品が1時間半にわたって大聖堂に響いた。

3. 会議の概要

第1日目の1月5日(月)は、午前に開会式があり、それに引き続いて、ルイ・ブライユの生涯に関する講演が3件あった。講演者は、バランタン・アユイ盲人福祉協会事務局長のマドレー・レジーヌ女史(フランス)、元WBU会長ユークリッド・ヘリー博士(カナダ)、ルイ・ブライユの伝記著者マイケル・メラー氏(米国)だったが、特に、メラー氏の講演が注目された。同氏は、長年米国の点字月刊誌“Matilda Ziegler Magazine for the Blind”(1907年の創刊以来、毎月1万部以上を世界各国の読者に無償で配布している英語の点字月刊誌)の編集長を務めた人(晴眼者)だが、在任中、国立パリ盲学校でルイ・ブライユ直筆の墨字の手紙をみたのを契機に、ルイ・ブライユの生涯について研究を始めたという。メラー氏は、2006年、新たに発見されたルイ・ブライユの手紙などの新資料をもとに伝記“Louis Braille : A Touch of Genius”を米国で刊行したが、このほど、そのフランス語訳が刊行され、会議場のロビーでも販売されていた。講演時間の制限が厳しく、メラー氏の講演も25分しか聴けなかったのが残念であった。

この日の午後は分科会があり、第1分科会では楽譜、第2分科会では数理記号、第3分科会ではITと点字というテーマで関連の発表が行われた。筆者はITと点字の分科会に出席したが、コンピュータを活用した点字図書の製作、点字ディスプレイの活用など、日本でもすでに普及しているITの活用例が紹介されていたのみで、目新しいものはなかったように思われる。

休憩の後、ワークショップがあったが、これもテーマ別に三つに分かれて開かれた。テーマとしては、触る芸術、触図と地図、ゲームと点字の三つの分野が取り上げられていた。筆者はゲーム関係の分科会に出席したが、公用語として指定されていた英語の通訳がなかったため、1時間にわたり、フランス語だけの講演を聴くことになってしまった。最前列に席をとったため、途中で抜け出すわけにもいかず、会議が終わってから議長を務めたカナダのケベック州のルイ・ブライユ協会の方に内容の解説をしてもらって何とか理解できた次第である。それによると、ベルギーやカナダでもゲームに点字を活用している事例があり、その具体的な報告がなされたというが、具体的なものをみるかぎり、日本で出回っているカードゲーム、その他の各種ゲームと比べて取り立てて新しいものがあるとは思えなかった。

第2日目の1月6日(火)は、午前中は、世界の点字というテーマで、元WBU事務局長のペドロ・スリータ氏が各国の点字について講演した後、日点の田中徹二理事長

が日本の点字翻案の経過と日本点字表記の特徴について報告した。同氏の報告は、日本語の特徴を踏まえた内容で少し難解に思われたが、盲人エスペランティストとしても有名な人々や、言語学を専攻していた視覚障害者なども参加していたこともあって、的確な質問があったのには少し驚かされた。

その後の全体会では、アラブ地域、スラブ地域、アジア地域、アフリカ地域など、各地域での点字の開発や統一の動向について関係者が報告した。アラビア語点字について講演したサウジアラビア王国文部省のナシル・アリ・アブドゥラール・アル・モサ氏によれば、アラブ語圏では9通りの表記法が混在していること、また、右から書く方式もあれば左から書く方式もあるなど、点字表記も混乱を極めており、統一が非常に難しいという。

また東南アジア地域の点字開発について講演したタイのラチャスーダ大学のニョンフォル・ウィラマン氏によれば、タイ語については1939年のバンコク盲学校の開設以来、創設者のジュヌビエブ・コールフィールド女史(1888~1972、全盲の米国人)が開発した点字があり、これを基礎に発展してきたという。カンボジアとラオスについては、1990年代になってようやく点字が開発されたが、それには、タイ語の点字が影響を与えているようである。

第3日目の1月7日(水)の午前には、社会生活での点字の活用事例について報告があった。午後にも引続き報告があったが、ユニバーサル・デザインの中に、点字記号を取り入れていくための動きについての報告がいくつかあったほか、「雇用と社会統合」のテーマを掲げた分科会では、3人の発表があった。筆者は、この分科会で「点字：視覚障害者の選挙権を実現するための重要な手段」と題する講演を行った。1925年の普通選挙法で点字投票が認められるまでの経過、1928年における初めての点字投票の結果、第二次大戦後の新憲法の下での点字投票の拡大、さらに最近における点字選挙公報の発行など、日本における視覚障害者の選挙権の保障の歴史と現状について簡単に紹介する内容であった。講演後、点字投票に伴う投票の秘密の保持をどのようにしているか、という質問があったが、これについては、一定の資格を備えた者が守秘義務を課せられたもとに開票することを説明して、秘密保持には万全を期していると回答した。

最後の全体会では、WBUのマリアン・ダイヤモンド会長が座長につき、会議の成果をまとめた。主催者が委嘱した委員により起草された決議案が朗読され、満場の拍手をもって採択された。決議内容は6項目あったが、重要課題の一つとして、従来ユ

ユネスコが後援して作成していた「世界点字総覧」の編纂の継続を求めることが謳われていた。ユネスコは、1952年に「世界点字総覧」(World BRAILLE Usage)を編纂・発行し、1990年には、ユネスコの名義で、米国連邦議会図書館がその第2版を発行している。決議では、これをさらに改訂することをユネスコに求めている。

4. ルイ・ブライユの生家を訪ねて

ユネスコ本部での3日間の会議を終えて、翌日の1月8日(木)には、国立パリ盲学校内の博物館の案内と、パリ東方約40kmのクーヴレという村にあるルイ・ブライユの生家の見学が行われた。筆者は午後のグループに参加して、クーヴレに向かったが、生家見学は1987年9月以来21年ぶりであった。往時と異なり、ルイ・ブライユの生家保存運動が盛んになったためか、展示品も充実してきたことが注目された。1階には、ルイ・ブライユの父親の仕事場、パンを焼くための大きな天火のある台所、食堂などがあり、2階にはルイ・ブライユが盲学校で学んでいた当時の浮き出し文字の教科書や、その後の点字図書、世界各国で使われている点字器などが陳列されていた。日本点字図書館で販売されているN632というプラスチック製6行書きの懐中定規もこのコーナーの一角に置かれていた。ほとんどの展示品に手で触れたが、視覚障害者が一時に多数詰めかけたため、時間内にいろいろなものに触れなかったのが残念である。

パリから約40km離れたこの村をルイ・ブライユが出て行ったのは1819年、10歳の時である。当時は馬車で4時間かかったというが、現在では交通渋滞さえなければ3,40分のドライブで着く郊外である。ルイ・ブライユが生まれてから200年、この間に馬車から鉄道、そして自動車へと、移動手段は画期的な進歩を遂げてきたが、ルイ・ブライユが考案した点字、つまり、視覚障害者が自ら書いて自ら読める文字の重要性は今なお変わらない。ルイ・ブライユの生家を訪問し、ルイ・ブライユが生きた19世紀前半当時の視覚障害者の状況を思いながら、これからの点字についていろいろと考えるよい機会であった。WBUでは、ルイ・ブライユの生家を世界遺産に指定するように、ユネスコに働きかけるというが、近い将来にぜひ実現してほしいものである。

5. おわりに

今回の会議を通じて感じたこととして、世界各国と比べた場合、点字記号の開発、点字図書の普及、点字識字率、点字に対する社会の認識など、どれをとっても、日本は最先進国に位置づけられることを指摘しておきたい。一方、フランスでは最近にな

って数符を変更したり、英語圏では統一点字の開発と実用化が進むなど、21世紀への対応が進められていることにも注目する必要がある。日本語の特性や点字をめぐる歴史を考えれば、こうした欧米の動きと対応して日本点字を変更することは難しいだろうが、各国で進められている点字識字率の向上のための取り組み、特に先進国における点字離れへの対策については、各国と協力して日本の資源とノウハウを提供しながら、国際的な貢献を視野に入れた活動が期待される場所である。

ルイ・ブライユ生誕200年を記念して、世界各国でさまざまなイベントが行われる中、母国フランスで開催されたこのような記念会議に招待されたことは、筆者個人にとって名誉なことであるとともに、日本から点字の活用に関するユニークな実践の歴史を紹介できたことは大いに意義あるものだったと思っている。日本から、田中徹二氏を含めて二人の発表者を招待してくださった主催者に感謝するとともに、招待に応じるため、さまざまなご配慮をいただいた日本点字委員会のみなさまに改めてお礼申し上げます次第である。特に、多忙な日程をやりくりして同行していただき、パリ滞在2日目にして身体に故障が出たため、開会式を待たずに帰国の途につかれた高橋秀夫氏（視覚障害者生活情報センターぎふ館長）にはたいへんご苦勞をおかけしてしまった。高橋氏の帰国後は、会場内の移動などで田中徹二ご夫妻のお蔭で無事会議の全日程に参加することができた。ここに記して改めてお三方に感謝申し上げます次第である。

ルイ・ブライユ生誕200年記念式典に参加して

筑波大学附属視覚特別支援学校教諭 あおまつ 青松 としあき 利明

1 はじめに

2009年1月4日から8日の5日間、フランスでルイ・ブライユ生誕200年記念式典（Commemoration du Bicentenaire de la Naissance de Louis Braille）が開催された。本稿では、5日から7日の3日間、パリのユネスコ本部において開催されたカンファレンスの内容の一部を紹介する。

カンファレンスでは、フランス語、英語、スペイン語の同時通訳があり、参加者は世界46カ国から500人を超えた。その中には、歴代の世界盲人連合の会長、各国の視覚障害者当事者団体や支援団体の代表者などそうそうたるメンバーが含まれていた。スピーチのたびに点字を考案したブライユの功績を称える拍手喝采があり、参加者の誰もが点字の有用性やその価値を再確認することとなった。

ユネスコ憲章前文には「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とある。ユネスコ本部の庭には憲章前文が英語や中国語など多言語で書かれた石碑が建てられていた。ユネスコでは1975年に点字制定150年を記念したカンファレンスが催されている。ブライユ生誕200年を迎え、記念式典もこのユネスコ本部で開催されたことは、感慨深いものがあった。参加した我々は改めて、心の中に「平和のとりで」を築く大切さをかみしめるとともに、視覚に障害のある者が文字を通して効率的に学習したり、情報の入手・発信ができることを可能にする礎を築いてくれたブライユの功績を再認識することとなった。

2 ルイ・ブライユ生誕200年記念式典カンファレンスの概要

1. 開会式

カンファレンスの開会式では、ルイ・ブライユの功績を再確認するスピーチが続いた。イギリスの元教育・雇用大臣デイビッド・ブランケット氏をはじめ、発表者の多くが、「真っ暗でも、布団の中で読める点字はすばらしい」とユーモアを交え点字の様々な優れた点を紹介していた。その中で特に強調されていたことは、浮き出した線の凸文字などと比較し、ブライユが視覚障害当事者であったからこそ、視覚に障害の

ない人の発想とは異なる触弁別の特性に適した視覚障害者が読みやすい点字を考案できたのだということであった。そして、6点点字を考案したブライユは、ゲーテンベルグに匹敵する偉大な功績を残したと賞賛していた。

元世界盲人連合会長のユークリッド・ヘリー氏(カナダ)は、テクノロジーと点字に関連したエピソードを紹介していた。彼が8万8千語に及ぶカナダの盲人史を執筆できたのは、コンピュータに接続した点字ディスプレイを用い、文章の一部始終を点字で確認できたからであると述べた。また、ヘリー氏はカナダのシンガーソングライターで、自身も視覚障害者であるテリー・ケリーによるルイ・ブライユを称えた歌「メルシ・ルイ(ありがとう・ルイ)」が2009年1月16日に発売されることを紹介していた。その歌は、オフィシャルホームページで試聴できる(<http://www.terry-kelly.com/message.htm>)。

2. 点字と触図

今回のカンファレンスでは、点字に関するさまざまな分科会が並行しておこなわれていた。その中には、触図に関するものもあり、点字と同様に視覚に障害のあるものにとっての触図の重要性が何度も指摘されていた。

アメリカのパーキンス点字・録音図書館のキム・チャールソン氏は、点字タイプライターを用いて視覚に障害のある子どもが、自分で触図を作成する方法を報告した。パーキンス・ブレイラーを使って点字用紙に描かれたエッフェル塔の点図が配布され、子どもたちの想像力や触る力を育てるために、動物や身近なものを点図で表現し、点図を触って楽しむことが大切だと強調していた。ただし、点図など触図をみるには適切なトレーニングが必要であることも忘れずに指摘していた。なおキム・チャールソン氏は2009年6月に **Drawing With Your Perkins Braille** という本を出版している。

パリ盲学校の地理の教師キャサリン・フェイントツ氏は、触図作製のためのガイドラインがまだ整備されていないこと、見た目ではなく触覚の特性に配慮した触図を作製することの重要性を指摘していた。また、カナダのナザレ・ルイ・ブライユ・インスティテュートのピエール・ファーランド氏は、北米では触図作製のガイドラインをまとめ、2009年に出版する予定であることを発表していた。

3. 点字と社会参加

全体会「新しいテクノロジーと点字」では、フランスのバルンタン・アユイ協会の会長フィリップ・シャザル氏が、点字は読み書きの道具であると同時に、社会参加の

道具であると述べていた。1200名の卒業生を世に送り出していることから、シャザル氏は、中途失明者の点字習得の難しさと心理的カウンセリングの重要性についても言及していた。その上で、音声と点字を併用したメディアの活用については、音声のメリットとして大量の文章を速く読むことができるが、句読点やスペル・文脈を正確に理解するには、やはり点字が必要であると指摘していた。そして、効率よく仕事をするには、学校やリハビリテーション施設で点字を習得し、積極的に点字を使う必要があると述べていた。自立、社会参加を支える道具としての点字の重要性を唱えたシャザル氏の発表は、聞く者の涙を誘い大きな拍手が送られていた。

4. 点字と教育

同じ全体会のもう一人の発表者、パリ盲学校の英語教師マリー・エクター氏の発表も参加者に強いインパクトを与えるスピーチであった。4歳から点字を使用しているというエクター氏は、読み書きの手段として点字を使えることで、健常者の中でも主体的に役割を担うことができると述べていた。また、初等教育において読み書きの基礎を習得することで中等教育における教科学習が可能となり、社会参加につながることを指摘していた。そして、点字を十分に習得できず、パソコンの音声合成に頼り教科書を聞かざるを得ないという統合教育の現状を紹介し、教師の説明とパソコンの音声と同時に聞くことは、不可能であると批判していた。その上でエクター氏は、最後にブライユに関して、「新し物好きの彼が現代に生きていたら、パソコンや点字ディスプレイなど最新機器を使いこなしていただろう」とユーモアたっぷりに話していた。

5. カンファレンスの資料とルイ・ブライユの書簡集

発表者の大半が視覚障害当事者であり、カンファレンスの資料や昼食のチケットに至るまですべて点字と墨字の両方の記載があったこと、点字のパリ市内の地下鉄案内や会場付近の触地図などが資料の中に含まれていたことなど、ブライユが考案した点字や点字から発展した触図がカンファレンスの中で存分に活用されていた。多くの発表者が指摘していたように、まさに点字によって視覚障害者が自立し、社会参加を実現してきたことの大切さが準備された資料からもうかがうことができた。

また、カンファレンス会場では、ブライユや点字に関する書籍、視覚障害者向けのグッズが販売されていた。その中に、限定出版されているブライユの書簡集があった。書簡集には、ブライユ自身が手書きで書いた墨字の手紙のほか、代筆で書かれた墨字の手紙、ラフィグラフという凸字のタイプライターを用いて書いた手紙の写真が掲載

されていた。この書簡集は点訳されたフランス語の冊子とセットで販売されていた。その前書きにおいても、「視覚障害者と視覚に障害のない人のかけ橋」となったブライユの功績が賞賛されていた。

3 おわりに

ブライユが生まれた1809年には、第16代アメリカ合衆国大統領リンカーンや進化論の父ダーウィンも誕生している。世界の歴史を塗り替えた二人と比べ、ブライユが歴史の表舞台に立つことは決して多くなかったかもしれない。しかし、43年という短い人生の中でブライユは6点点字を考案し、その点字によってこの200年の間に世界中の多数の視覚障害者が社会参加をし、自立の道を歩むことができるきっかけとなったことには大きな意味がある。ルイ・ブライユの発明した6点点字は世界各国に広まり、日本においても1890年に石川倉次の翻案が採用されてから来年で120年を迎えようとしている。今回の記念式典の参加は、ブライユの偉大さと点字のすばらしさを改めてかみしめる契機となった。

最後に、カンファレンスの内容とは異なるが、点字の重要性ということに関連して、紹介しておきたい報告書がある。この報告書は、2009年6月に、全国盲学校長会大学進学対策特別委員会が発行したもので、「シリーズ 視覚障害者の大学進学 別冊 『視覚障害学生実態調査報告書』」というものである。筆者自身が調査の計画・実施・報告書の作成のコーディネートをこなした。

この報告書は、2008年8月から2009年3月にかけて、全国の大学に在学する視覚に障害のある学生を対象に、大学生活における支援について、現状の支援内容と本人の希望を、質問紙を用いて調査しまとめたものである。

資料の入手についての部分を見てみると、大学における教科書の入手については、やはり点字の希望がたいへん高い結果であった。また、必要な支援機器について見てみると、携帯型点字端末や点字プリンタを活用している割合がきわめて高い結果であった。この報告書からも視覚に障害のある者が学習をする上で、点字が不可欠になっていることがわかる。しかし、点字での教科書や点字に関わる支援機器はまだまだ十分に提供されていないことも明らかになった。

点字を使う人口は少なく、社会的にはマイノリティである。しかし、視覚に障害のある者にとって点字は不可欠なものであり、そのことを視覚障害者自身が強く認識し、社会の中でアピールしていくことが大切ではないかと考える。

雪の中の三人女とルイ・ブライユ生誕200年記念国際会議

そら
空 ひふみ

「△×△！……×△×！」

前方でなにやら大きな声がする。

パリの地下鉄10号線を降り、改札へ向かっている時だった。見ると、出口でご婦人がこちらの方を向いて立っている。また叫んだ。

「ジョゼフィーヌ！ どう？ 大丈夫？ こっちよ！」

「ええ、大丈夫よ！ 今行くわ！」

今度は後方からそれに応ずる声もした。思わずふりかえる。

盲人女性が二人、階段を上りきったところだった。再び前のご婦人を見る……と、傍らに犬が。盲導犬だ。先に着いて、仲間を呼んでいたのだ。

後ろの二人は、声のする方へと改札口をさがしながらやってくる。

「もっと左です！ もう少し左によって！」

とっさに声をかけていた。瞬間、はっと気づく。改札出口は扉付きだ！ 急いで自分の改札を抜け、隣のドアをつかむ。

「そのまま、まっすぐ進んでください。ドアをおさえていますから。」

ルイ・ブライユ生誕200年の記念国際会議第1日目の朝だった。

二人の女性は、ジョゼフィーヌにシルヴィだと名のり、50年来の友人なのだと話してくれた。

先ほどの盲導犬を連れてきたご婦人も含め、4人+1頭になった一行は、小雪舞う中を会場のユネスコへと向かう。お二人をガイドしながら、慣れない雪道を歩かねばならない。それほど積もってはいないが、凍っていて滑りやすい。そんな私のぎごちなさを察知したのか、ジョゼフィーヌは、

「転びそうになったら、手をはなすわね。あなたまでまきこんじゃうから。」

と笑っている。シルヴィもニコニコして頷く。

駅から10分たらずの道中だが、凍っていない所を選びながら、もたもた歩く私たち3人に比べ、盲導犬のご婦人はすたすたと、はるか先まで進んでいた。

「ガイドでこうも違うとは……。まあ仕方ないか。それに、お二人とも楽しそうだから良しとしよう。道を渡るときは、どの車もみんな止まってくれるから助かるし。そういえば、『歩行者がいると車は必ず止まることになっているの。それがパリよ』って、前にフランス人の先生がおっしゃっていたなあ……。映画『シャレード』で、オードリー・ヘプバーンが同時通訳をしていたお部屋、本当に会場のユネスコの中にあるのかしらん」などなど、頭の中はさまざまなことが、浮かんでは消え、浮かんでは消えていた。そんなふうだからなおさら、速く歩けるわけがない！

結局、最後は3人連れになってしまった。そして、このお二人と会議の三日間をご一緒することになるのである。

ユネスコの入り口には長い行列ができていた。雪の中、傘もささずに並んでいる。私たち3人も雪をはらいながら待つ。「こんな時、日本だと傘だらけだろうに。ああ、フランスにいるんだなあ」と、しみじみ思う。

受付では、フランス語か英語かの希望した言語ごとに分けられ、書類一式のはいった大きめのバッグを渡される。セキュリティチェックの後、中にはいる。

コートを預ける人、すぐに会場のホールに向かう人、そして、奥の喫茶コーナーでくつろぐ人、人、人。そこかしこで、挨拶をかわす声、おしゃべりする人の軽やかなざわめきが心地よくひびく。さすが地元だ。フランス語が飛びかっている。

まず、コーヒーを1杯いただく。ヴィエノワズリ（菓子パン）を手に、ジョゼフィーヌとシルヴィは知り合いから知り合いへと声をかけ、話が尽きない。

ゆったりしたひとときの後、ホールへ。中央通路が広くとられ、左右にテーブルのある席、または椅子だけの席が並ぶ。それぞれ好きな所に座れる。人の常だろうか、テーブルの席から埋まっていく。ただ、どこに座っても、ヘッドフォンで同時通訳を聞くことはできる。

壇上には発表者がそろっている。いよいよ会議の始まりだ。

持ち時間が足りないぐらいに熱心な講演が続く。その後の質疑応答も、途中で制限されるほど、あとからあとから手があがる。

午前の休憩になった。

ホールの前には、本やカレンダーなどの売り場がしつらえられ、触図のパリ名所案内書の紹介などもおこなわれていた。喫茶コーナーは朝よりもにぎわっていた。飲み

物の種類も増え、ボランティアの人たちが親切に対応してくれる。参加者は、自分の名前と国の書かれた札をさげるので、こうした時間に言葉を交わして、親しくなれる。

午前の部が終われば、昼食の時間だ。2時間たっぷりある。

7階の食堂へ大移動が始まる。この食堂は、失業者などへの炊き出しをすることもあるという。

ジョゼフィーヌとシルヴィ、会場で知り合ったモニカ（盲人）の3人を、ひとりでガイドすることになった。日本でもしたことのない体験である。横いっぱい広がってもらったり、また縦1列になってもらったり、まるで『金のがちょう』の行列だ。へたくそなガイドで、申し訳なく思う。途中から、ジョゼフィーヌの友人でもあるボランティアのクリスティンが助っ人で加わってくれた。

食堂はガラス張りで見やすく、エッフェル塔も窓の向こうに見える。十人掛けの丸テーブルが所狭しと配置されている。奥の席から座るよう案内される。

前菜、主菜、デザートと順に供される。両隣、さらにそのお隣へと話の輪が広がる。おそらくどのテーブルでも同じことがおきているのだろう。デザートから、コーヒー・紅茶の頃になると、そのざわつきたるや相当なもので、よくもまあ、こんなにおしゃべりができるものよと、その喧騒に辟易してしまった。朝の心地よいざわめきとはまるで違う。ジョゼフィーヌにいたっては、うるささに耐えられず、デザートもそこそこに、クリスティンと引きあげてしまった。

後に、ジョゼフィーヌはぼつりと漏らした。

「お昼はごめんなさいね。でも、あのままあそこにいたら、病気になるところだったわ。とても気分が悪くなってしまったんですもの。」

午後の分科会は、みんなバラバラになってしまうが、ボランティアさんたちが、それぞれを部屋まで案内してくれるという。場所を教えてもらい、ひとりで行ってみた。

地下の小部屋に入ったとたんに、「あらまあ」と中を見回してしまった。大きさといい、つくりといい、まさしく『シャレード』に出てくる部屋だった。だが、同時通訳のブースには誰もいない。結局、参加者どうしが、フランス語と英語で話し合うという、そらおそろしいひとときになってしまった。この会議中で一番短かったと感じたのも、緊張のせいだろうか。

分科会終了後、明日の約束をして二人と別れた。こうして第一日目は終わった。

あとの二日間も同じような流れであった。

二日目は、田中徹二先生の「日本の点字」についての講演があった。発表後、「日本語には『ハシ』のような同音異義語が多いが、読み誤ることはないのか。どのようにしているのか」といった質問が出た。三日目には、指田忠司先生が「日本での点字投票」について話された。早くから選挙の点字投票が実施されていたことに対して、驚き、感心する声が入ってきた。そして、「投票者のプライバシーはどのように守られるのか」といった問いかけもあった。日本語や日本への関心の高さが感じられた。

二日目の夜は、メディアセンター完成のカクテルパーティである。

ユネスコからメディアセンターまでのバスも用意されていたが、それほど遠くないという。ボランティアさんに誘われるまま、歩いていくことにした。ジョゼフィーヌも一緒だ。

アンヴァリッドを臨む大通りを渡り、夕暮れ、氷点下のパリの街に行く。パリジェンヌ気分を味わいつつも、強い風が吹くとその寒さは身にしみた。暖かい建物の中に入った時はほっとした。

パーティのはじめに、今会議の事務局長さん（盲人女性）は、うれしそうにご挨拶された。

「メディアセンターができました。これで読みたい本がすぐに読めるようになりました。……ずっとずっと昔からの夢でした。どうぞ3階に行って、ごらんください。とうとう夢がかなったのです！」

まだ新しく、きれいな部屋にはアルファベット順に整理された棚が並び、拡大読書器やピンディスプレイのついたパソコンも備えられていた。

パーティはにぎやかに続いていたが、ジョゼフィーヌと共に早めに帰った。

翌日、三日間の会議は無事終了し、パリ市庁舎での夕餐会でその幕を閉じた。

パリ市長のご挨拶もあり、事務局長さんも満足そうであった。

「典型的なフランス料理のコース（同席したボランティアの方の言）」を静かに楽しく語りながらいただいた。さすがに昼食時のけたたましさはなかった。荘重で華麗なホールにふさわしく、あくまで優雅に、上品に（？）である。話題は、明日の見学

会のこと、それぞれの国のこと、そしていただいているお料理やワインについてなどといった他愛のないものだったけれど。

こうしてみんなが食事を楽しむ間も、役員さんたちは、帰りの車等の手配に各テーブルを忙しそうにまわっている。誰かが言った。

「役員達は、明日の見学会を終えたらバタンキューよ！」

「そうだろうなあ、きっと。主催者側は、準備から始まり、終わりまで気が抜けず、大変なものなあ」と、ぼんやり思った。実際、事務局長さんはその後、十日ほども仕事を離れ、休息に専念しなければならなかったぐらい、疲労困憊していたそうだ。

最終日、希望者による見学会も予定通りにまわられた。博物館になっているルイ・ブライユの生家では、案内の方が丁寧に説明してくださり、日本の点字器（6行32マス）や本も出してきてくださった。実際にそれで点字を打ったアメリカのお嬢さんが驚きの声をあげた。

「日本人は、こんな小さな点字を読めるの？」

博物館に日本製のものも置かれていて、なんだかうれしかった。そういえば、いつも持ち歩いている携帯用の点字器（5行20マス）を、期間中、何人かに見せたことがあった。

「自分たちの国には、こんなに感じの良い、使いやすい携帯用の点字器はない。」と、みんなにほめられ、羨ましがられた。

中間一夫先生が、その昔、外国の用具などを苦勞して入手されたというお話を、ふと思い出した。先生がお聞きになったら喜ばれたらうにと、ちょっぴり悲しく残念だった。

スタッフの方々のおかげもあって、すべてが順調だった。

第一日目の朝から見学会までの間に、たくさんのお会いがあった。今もメールのやりとりを続けている人もいる。でも、あれきりになった人たちとも、どこかでご一緒する機会があれば、「生誕200年の会議でお会いしましたね」のひとつで、すぐにうちとけて話がはずむことだろう。

ありがとう、ブライユさん！ ありがとう、点字！ そして、ご指導くださった先生方に感謝!!

生誕300年祭にも、ぜひ参加したいものだ!?

企画展「・・・点天展・・・」がめざしたもの

国立民族学博物館 広瀬 浩二郎

ヘレン・ケラーの再評価

2009年8月13日～11月24日、国立民族学博物館において企画展「点字の考案者ルイ・ブライユ生誕200年記念『・・・点天展・・・』」が開催された。13歳の時に失明し、以来30年近く点字を使っている僕は、視覚障害の当事者として、さらには障害者文化を研究する人類学者として本展の企画・運営に携わった。展覧会には著作や講演と異なる魅力がある。今回も小学生、外国人などを含む老若男女が企画展会場を訪れた。もちろん、何気なく展示場を通り過ぎるだけという人もいるが、中には点字や視覚障害分野に関心のない健常者（見常者）が珍しい展示物に引かれて立ちどまるケースも多数見受けられた。僕たちに「モノの力」を実感させてくれるのが展覧会である。

とはいえ、点字は見た目のインパクトが弱い。白い紙に解読できないボツボツが書かれていても、一般来館者に興味を持ってもらうことは難しい。どうすれば企画展目的ではなく、ふらりと通りかかっただけの来館者の足を止めることができるのか。これは展示資料を収集・選定する段階からの重要テーマであった。「点字＝視覚障害者用の特殊な文字」という固定観念を打破し、点字の楽しさと奥深さを伝えることを狙いとした本展が成功するかどうかは、視覚障害関係者以外の一般来館者にどこまでアピールできるかが鍵だった。

企画展のイントロダクションとして僕が選んだ展示物は、ヘレン・ケラーの点字蔵書である。点字を使用していたもっとも有名な人はだれかと訊かれれば、おそらく多くの人々がヘレン・ケラーの名を挙げるだろう。彼女が実際に手を触れて読んでいた点字本、100余年前の古ぼけたボツボツは、僕が期待した以上の「モノの力」を発揮してくれた。ヘレン・ケラーの蔵書を米国から借用して日本で初公開するということで、マスコミの取材も相次いだ。また、企画展会期中に『奇跡の人』が上演され、その関係でヘレン役、サリヴァン先生役の女優さんが企画展を見学するという嬉しい出来事もあった。ルイ・ブライユには少し申し訳ないが、展覧会の導入としてヘレンを登場させた演出効果は大きかったようだ。

主演女優の民博来館後、『奇跡の人』上演パンフレットにヘレン・ケラー論を書いてほしいというありがたい依頼が舞い込んだ。従来、ヘレンは見えない・聞こえない

・喋れない三重苦を克服した「奇跡の人」として尊敬されてきた。僕はヘレン・ケラーの専門家ではないが、原稿執筆に当たって彼女の生涯、「奇跡」についてじっくり考えてみた。

もともと原題の「The Miracle Worker」とは奇跡を起こした人という意味であり、舞台ではサリヴァン先生の献身的な教育の意義が強調されている。しかし、なぜか日本ではすっかり「奇跡の人＝ヘレン・ケラー」というイメージである。判官びいきなどとも共通する心性なのか、日本人は「障害を乗り越える」「ハンディキャップに負けず頑張る」ストーリーを好む。視覚も聴覚も「使えない」ヘレンが懸命に努力して、米国最難関の大学にパスし、社会事業家となって活躍する。三つのマイナスを抱えるヘレンが、五体満足の健常者でもなかなかできないことを成し遂げる。その苦難と栄光の生涯が、とりわけ日本では「奇跡」として賞賛されるのである。

音声による情報入手が困難なヘレンにとって、教養を身につける最大の、そしてほとんど唯一の方法は点字を読むことだった。100年以上も前、点字本がきわめて少ない時代に大学で勉強した彼女の苦労は想像を絶する。だが、彼女の奮闘を「奇跡」として解釈するだけでは新たなヘレン・ケラー論は生まれない。僕は上演パンフレットで「触覚の可能性を拓いた先駆者」としてヘレンを再評価することを提案した。

『奇跡の人』のクライマックスでサリヴァン先生はヘレンの手を取り、井戸のポンプから流れる水にさわらせ「water」と指文字で綴る。ここでヘレンは世の中のあらゆる物に名前があることを悟る。いわば彼女は触覚で世界を認識したといえよう。ヘレンが視覚と聴覚を「使わない」代わりに触覚の潜在力を極限まで追及したことこそ、「奇跡」と呼びうるのである。「使えない」（マイナス）から「使わない」（プラス）への発想の転換は、テレビやインターネットなどによる情報に支配された視覚優位の現代社会にあって、感覚の多様性を再考するきっかけともなろう。

ヘレン・ケラーは究極の触覚人間だが、視覚を「使わない」盲人（触常者）ならではのライフスタイルに立脚し、独自の触覚文字を創造したのが彼女の先輩ともいえるルイ・ブライユだった。企画展「・・・点天展・・・」では触覚にこだわる各種関連ワークショップを行なったが、参加者が自己の「さわる力」の豊かさに気づく小さな「奇跡」に立ち会うことができた。点字の展覧会といえ、マイノリティである視覚障害者への理解促進という福祉の文脈でとらえられがちだが、じつは万人が共有する触覚（五感）の可能性を切り開くための壮大なる実験であったことを僕自身あらためて感じている。

僕にとって昨年は「触文化」（さわって知る物のおもしろさ、さわらなければわからない事実）を理論化し、広く一般社会に普及するという意味で記念の年となった。理論化というにはいささか未熟だが、新著『さわる文化への招待－触覚でみる手学問のすすめ』（世界思想社）を刊行し、その内容に基づく点字の企画展も実施した。有意義な展覧会の実現のために貴重な資料を提供して下さった日本点字委員会のご協力に対し、この場を借りて感謝の意を表したい。

企画展「…点天展…」展示資料リスト

※以下で「＊」を付したパネルが日点委の資料提供により作成したものである。

1 〔生きる：“点字力”を發揮した偉人たち〕

石創画によるルイ・ブライユの肖像画。ヘレン・ケラーの銅像と紹介パネル。ヘレン・ケラーの点字蔵書。パーキンス盲学校関連の写真パネル。岩橋武夫の銅像と紹介パネル。^{はなわ ほ き い ち} 埴保己一の銅像と『群書類従』関連資料。

2 〔つくる：点字の成立・発展史〕

日本で最初の活版式点字印刷機（レプリカ）。点字ローラー印刷機と印刷用亜鉛版。
＊ルイ・ブライユ関連年表。ルイ・ブライユの生家と12点点字の写真パネル。ルイ・ブライユを描いた世界各地の記念切手。世界で最初に作られた浮き出し文字による本（レプリカ）。＊石川倉次関連年表。石川倉次の写真パネル。＊アジアの言語で「ありがとう」を表現する点字の説明パネル。＊楽譜点字の説明パネル。世界の点字器とタイプライター各種。投票用点字板。

3 〔ひらく：点字出版物による触学〕

日本ライトハウスの紹介パネル。触図印刷の説明パネル。戦前と現在の点字地図帳。点字絵本各種。戦前と現在の盲学校用教科書。拙著『さわる文化への招待』の原本・点訳本・音訳本。

4 〔伝える：点字新聞の役割〕

点字毎日のあゆみパネル。中村京太郎の写真パネル。菊池寛賞表彰パネル。「点字毎日」工程パネル。発刊当時の編集部風景の写真パネル。印刷用アルミ版。「点字毎日」の創刊号と戦時中の号。「点字毎日」最新号の点字版・活字版・音声版。

5 〔楽しむ：“点字力”を活かした触覚芸術〕

^{たかひろ} 江田拳寛氏の石創画「高松塚古墳壁画」。横山稔氏の継手アート「継手縁台」。内山春雄氏のバードカービング「トキ」とタッチボックス。

世界点字協議会 (World Braille Council:WBC)

第1回委員会議事録

世界盲人連合 (World Blind Union:WBU) の WBC が再開され、第1回委員会が11月5, 6日、マドリッドで開催された。WBU 6ブロックの代表及び学識経験者の14人が委員として任命され、そのうち12人が出席した。それ以外に、Maryanne Diamond (WBU 会長、オーストラリア)、Enrique Perez (WBU 事務局長、スペイン)、K. L. Mittal (財務局長、インド) らが出席した。その議事録を紹介する。

1. 点字表記や普及についての検討事項 (氏名は検討責任者)

(1) 点字コードの統一についての検討

- a. 通常の数字について
- b. 句読点の統一について
- c. コンピュータ点字記号と図形記号の統一について
- d. 発音記号の修正について

Otto Prytz, Joe Sullivan, Jacques Cote, Mohd Affaneh

(2) 理数表記の国際的統一への挑戦

Pete Osborne, Joe Sullivan

(3) 教科書における写真や絵についての説明

Diane Wormsley, Judy Dixon

(4) 点字書製作の国境を越えた共同化

(5) 点字に関するデータベースの構築

- a. 国及び地域における点字委員会の紹介とその活動
 - b. 電子図書館の紹介
 - c. 国際的に点字図書を供給できる図書館の紹介
 - d. それらの図書館の所蔵カタログ
- #### (6) 点字委員会が存在していない国への働きかけ

Pete Osborne, Judy Dixon

(7) 点字製作及び点字指導に関する英語書を途上国用に翻訳する取り組み

Peter Brass, Diane Wormsley, J. L. Kaul

(8) 点字の活用について

- a. 点字指導のガイドライン作成（特に盲児、中途失明者、重複児向け）

Diane Wormsley, A. K. Mittal

- b. 利用者のための点字活用（薬箱の点字、公共場所など）

Peter Brass, Pete Osborne

2. World Braille Usage 第3版の出版について

UNESCO に対する働きかけは、Maryanne Diamond 会長に委嘱。

Judy Dixon

3. 点字会議の開催

2011年末、ベルリンで開催を予定。UNESCO への働きかけは、Maryanne Diamond 会長に依頼。

Maryanne Diamond, Tomas Kahlisch, Pete Osborne

4. 生誕200年記念フォローアップ企画

途上国への点字機材等の供給

Pete Osborne, Maryanne Diamond

これらの課題について、2012年の4年間の間に、担当責任者を中心にどう対応していくかが検討される。WBU-AP の代表として、田中が参加しているが、データベース構築の資金として、2009年に要求されていた2,000ドルについては、日本点字委員会に寄贈された寄付金からすでに WBU に振込んである。今後は、WBC の活動に、日点委としてどう対応していくかが、日点委に課せられた課題である。

日本点字委員会総会報告

日本点字委員会は、2009年6月6日・7日の両日、京都市北区の京都ライトハウス及び上京区のザ・パレスサイドホテルにおいて、第45回総会を開催し次の事項を協議した。出席者は、木塚泰弘会長はじめ委員20名、事務局員3名、会友2名、オブザーバー等20名、計45名であった。

1. 『日本点字表記法』における表記符号の用法についての問題点と改訂に向けての提案

第44回総会における近畿点字研究会からの標記の提案を受けて、東北点字研究会・関東小委員会・関東地区点字研究会から検討結果の報告があった。「カギ・カッコの用法を見直す」「行移しの許容」の2項目の提案については賛同を得たが、他の6項目の提案については現行規定を可とする検討結果であった。なお、上記の2項目と「見出しのページまたぎを禁止する」提案の3項目について、近畿点字研究会から修正再提案があり、協議の結果継続審議事項となった。

2. 『日本点字表記法』における書き方の形式に関する問題提起

近畿点字研究会から『日本点字表記法 2001年版』における書き方の形式について、脚本・対話などの表記、手紙、表、出納簿、目次、欄外見出し、注項目の追加、索引、図や地図などの9項目についての提案があり、各地域での検討課題とした。

3. 漢字や仮名で書き表された単位の切れ続きについて

「日本の点字 第32号」に検討案として公開してから事務局に寄せられた意見等はなかったため、検討案は確定したものとして、今後の取り扱いについて協議した。

4. 医学用語の切れ続きの指針

医学用語点字表記専門委員会から、創設以来8回にわたる委員会での審議結果の中間報告があった。医学用語の切れ続きを、(1)副次的な意味の成分の切れ続き、(2)自立可能な意味の成分の切れ続き、(3)自立可能な意味の成分に準ずる漢語的表現の切れ続きに分け、『日本点字表記法』の規定に基づいて指針として整理されている。

5. 日本点字委員会委員の定員増について

点字表記の体系化と普及に向けて、より広く意見を徴すべく、盲教育界代表委員及び盲人福祉界代表委員をそれぞれ1名増加し8名ずつとすることにした。

6. 点字ビッグイベントの開催について

日本盲人福祉委員会との共催で、2009年10月31日と11月1日の2日間、東京都新宿区の戸山サンライズにおいて、ルイ・ブライユ生誕200年並びに石川倉次生誕150年を記念して点字ビッグイベントを開催する。記念式典・記念講演会のほか、点字についての作文募集、点字競技会の実施、発展途上国への点字器等の寄贈支援活動などが予定されている。

7. 国立民族学博物館の点字についての企画展への協力について

広瀬浩二郎氏の企画になる点字についての企画展に日本点字委員会として、ルイ・ブライユと石川倉次に関する年表の作成、アジア諸国の点字の紹介、点字楽譜についての解説等の資料を提供して協力する。

8. 田中徹二副会長、WBCの委員に就任

点字についての国際的なデータベースの制作をめざしているWBU(世界盲人連合)は、WBC(世界点字協議会)の再開を企画している。そのWBCの委員として日本点字委員会が推薦した田中徹二副会長がWBU-AP(世界盲人連合・アジア太平洋地域委員会)の代表として就任することになった。

9. 委員の交替と事務局員の補充について

盲教育界代表委員の佐藤^{と き こ}智紀子氏(愛知県立名古屋盲学校)は坂井^{ひ と み}仁美氏(愛知県立岡崎盲学校)に、全国盲学校長会代表の学識経験委員・井口二郎氏(千葉県立千葉盲学校)は座間^{ざ ま ゆ き お}幸男氏(東京都立八王子盲学校)にそれぞれ交替した。また、事務局員として奥野^{ま り}真里氏(日本ライトハウス)が木塚泰弘会長の依頼を受け総会で承認された。

編 集 後 記

2009年はルイ・ブライユの生誕200年並びに石川倉次の生誕150年に当たる記念の年でした。これに関連する記念事業やイベントが国内外の各地で開催されました。本誌「日本の点字」第34号では、日本点字委員会がかかわった記念行事や記念のイベントに絞って特集することにしました。それでも、点字版は200ページを超すため、32マス・紐綴じでお届けします。読み応えのある34号になりました。

巻頭の「ルイ・ブライユと石川倉次」は、日本盲人福祉委員会と共催した点字ビッグイベントにおける阿佐博顧問の記念講演です。阿佐顧問みずから本誌のために記念講演の内容を点字の原稿にまとめてくれました。会場の雰囲気を感じられる文章です。

「点字の申し子、ルイ・ブライユ」の筆者・三宮麻由子さんは、2009年の第46回点字毎日文化賞を受賞されたエッセイストです。上智大学でフランス文学を専攻し、同大学の大学院博士前期課程を修了し外資系通信社に勤める翻訳家でもあります。2009年1月初旬、パリのユネスコ本部で開催されたルイ・ブライユ生誕200年記念行事に参加した筑波大学附属視覚特別支援学校の青松利明さんが入手してきたブライユの書簡集を三宮さんに読み解いてもらい、ブライユについての新たな知見や人柄について読み取れたら、三宮さんの感性で、ブライユについての一文を寄せてもらえないかと依頼しての寄稿です。この度入手した書簡集だけでなく、これまでに刊行されているブライユ関係の出版物をも参照して執筆してくれました。歴史的な時代背景や文化発展の推移からみると点字はブライユの生きた時代に生まれるべくして生まれたものと言いつつ切っています。興味深く、さわやかな一文です。

日本点字委員会が日本盲人福祉委員会との共催で実施した「点字ビッグイベント」については、その実際がどんなものであったかを事実即して記録しておきたいと考えました。開催当日の日程に沿った記録になりましたが、レポーターの木塚泰弘会長としては、2度と経験することのできないイベントただだけに、この企画に参画し実施することのできた感激をもう少し加えた報告書にしたかったようです。

マイケル・メラーさんの講演「ルイ・ブライユのすべて」は、メラーさんの講演内容からも水野由紀子さんの同時通訳の言葉からも講演全体を文章化して残しておきたいくらい充実した講演でした。事務局員の白井康晴さんが、メラーさんの『ルイ・ブライユ ― 天才の手法』を原文で読んでいたとのことでしたので、講演を「日本の点字」用に要約してもらいました。

パリのユネスコ本部ほかで開催されたルイ・ブライユ生誕200年記念行事に参加して、日本の点字について講じた田中徹二・日本点字図書館理事長には、発表内容と併せて記念行事全体の流れについての寄稿を依頼しました。日本点字委員会の代表として「普通選挙の点字投票と選挙公報」について発表した指田忠司・WBU-AP 会長には、アピールした発表内容とその反響についての寄稿を依頼したのですが、田中理事長と同じようなイベント全体にわたる報告になりました。

日本点字委員会から、この記念行事に積極的に打って出ようという雰囲気になったのは、我が国では1925年という早い時期に衆議院議員選挙法で「点字は文字とみなす」と規定し、1928年の衆議院議員の選挙では点字投票が実際に行われたことをはじめ、現在は点字の選挙公報が作製され、全国各地の山村や漁村での小さな投票所にも点字器が配備されていて点字投票が可能になっているという現状は、我が国が国際的に誇れる現実ではないだろうか、これをアピールする絶好の機会と確認しての企画でした。

指田さんの派遣に当たっては、付添いを会友の高橋秀夫・視覚障害者生活情報センターぎふ所長に依頼したのですが、現地のパリで体調を崩し帰国せざるをえなくなりました。指田さんの移動には田中理事長夫人の多大なご協力があったようです。

ユネスコの記念行事にフリーで参加した人のうちから青松利明さんと空ひふみさんに印象深かったことを寄稿してもらいました。筑波大学附属視覚特別支援学校の中学部・高等部で社会科の授業を担当している青松利明さんは、点字の触読や触図・触察といった触覚の活用にこだわる点字使用の中堅教師です。ペンネームの空ひふみさんは、フランス語も堪能な点訳ボランティアです。青松さんには、IT時代の点字についての知見や学校教育の立場から啓発されることがあったかといったことも含め、空さんには、記念式典の会場周辺の雰囲気などにもふれながら、それぞれフリーにレポートしてほしいと依頼して寄せられた文章です。

国立民族学博物館の企画展「・・・点天展・・・」については、この企画展の推進役であった広瀬浩二郎さんに企画展のめざしたものについて執筆してもらいました。

WBC については、さっそくに動きがあったようです。日本点字図書館の田中理事長の許へドイツの中央盲人図書館長のトーマス・カーリッシュェ氏から2011年9月26日から点字についての世界会議を開催するというメールが届いています。

2010年は日本語への点字翻案120年に当たる記念の年、引き続き、点字の魅力・素晴らしさを踏まえ、点字の普及にいそしむことにいたしましょう。

(小林 一弘)

日 本 の 点 字 第34号

2010年3月10日発行

発 行 日 本 点 字 委 員 会

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4

日本点字図書館内

電話 (03)3209-0671

FAX (03)3209-0672

郵便振替 00100-1-42820

印刷所 コロニー印刷

〒162-0034 東京都中野区江原町2-6-7
